

# 日本通訳翻訳学会 第 18 回年次大会

スケジュール  
交通アクセスと会場案内  
シンポジウム  
予稿集

2017 年 9 月 9 日(土)－10 日(日)

会場 愛知大学

日本通訳翻訳学会第 18 回大会スケジュール

開催日:2017年9月9日(土)~10日(日)

会場:愛知大学

第1日(9月9日)

9:45	7階ロビー				受付開始			
10:20 -10:30	L706				開会式			
10:30 -12:00	L706				<p style="text-align: center;">基調講演</p> <p style="text-align: center;">An Empirical Study on Consecutive Notes and Notetaking</p> <p style="text-align: center;">染谷泰正(関西大学教授)</p> <p style="text-align: center;">司会 山田 優(関西大学教授)</p>			
12:20 -13:00	L706				総会			
13:00 -14:00	昼食・休憩				L601 評議員会			
	L701 <b>A会場</b>		L702 <b>B会場</b>		L703 <b>C会場</b>		L704 <b>D会場</b>	
14:00 -14:30	<p><b>A-1</b> 「トランプ大統領を通訳する」</p> <p>鶴田知佳子(東京外国語大学)</p> <p>(司会:石塚浩之)</p>		<p><b>B-1 B-2</b> 「コミュニティの現場を支援する翻訳通訳テクノロジー」(翻訳通訳テクノロジー研究プロジェクト特別企画)</p> <p>立見みどり(立教大学)、山田 優(関西大学)、藤田 篤(情報通信研究機構)、長瀬友樹(株式会社富士通研究所)</p>		<p><b>C-1 C-2</b> 「日本の近世・近代翻訳論研究:収集からアンソロジー編さんへ」</p> <p>齊藤美野・坪井睦子(順天堂大学)、佐藤美希(札幌大学)、長沼美香子(神戸市外国語大学)、北代美和子(翻訳家・東京外国語大学)、南條恵津子(神戸女学院大学)</p>		<p><b>D-1</b> "Building evidence on the impact of translation segments to quality – A preliminary study"</p> <p>Yumiko Kinoshita-Motomura (Visiting Researcher, The University of Tokyo)</p> <p>(司会:武田珂代子)</p>	
14:40 -15:10	<p><b>A-2</b> 「同時通訳の訳出単位と訳出方略—オバマ米国元大統領広島演説の放送同時通訳をめぐって」</p> <p>河原清志(関西大学)</p> <p>(司会:石塚浩之)</p>						<p><b>D-2</b> "Development of a balanced quality assessment framework for Japanese to Simplified Chinese translation of CSR reports"</p> <p>Beibei He (Rikkyo University D)</p> <p>(司会:武田珂代子)</p>	
15:20 -15:50	<p><b>A-3</b> 「視聴者に「親切な」放送同時通訳とその限界」</p> <p>畑上雅朗(神戸市外国語大学)</p> <p>(司会:石塚浩之)</p>		B-3		<p><b>C-3</b> 「150年間に及ぶ米国憲法日本語訳にみられる翻訳語の変遷」</p> <p>島津美和子(立教大学D)</p> <p>(司会:田辺希久子)</p>		<p><b>D-3</b> 「「原文の歪曲」の謎: MNH-TTの校閲カテゴリ「X3」から見る学習者の訳出プロセスと学習効果」</p> <p>山田 優(関西大学)、大西菜奈美(関西大学M)、藤田 篤(情報通信研究機構)、影浦 峯(東京大学)、</p> <p>(司会:武田珂代子)</p>	
15:50 -16:10	休憩							

	L701 <b>A会場</b>	L702 <b>B会場</b>	L703 <b>C会場</b>	L704 <b>D会場</b>
16:10 -16:40	<b>A-4</b> 「聞き手の視点から見た同時通訳と逐次通訳」 新崎隆子(東京外国語大学) (司会:河原清志)	<b>B-4</b> 「『英語医療通訳入門』の授業報告—現状と課題—」 三浦美恵子(国際医療福祉大学) (司会:立見みどり)	<b>C-4</b> “Negotiating Spaces for Translated Literature: Reflections on Compiling Anthologies/Series of Contemporary Japanese Literature in English Translation” David Karashima (Waseda University) (司会:田辺希久子)	<b>D-4 D-5 ポスター発表</b> ・「産業翻訳における『機械翻訳有効案件』の成立条件と翻訳工程」 河野弘毅(ポストエディット東京) ・「同時通訳における語の欠落に関する定量的分析」 蔡 仲熙(名古屋大学大学院研究生)、笠浩一郎(三重短期大学)、松原茂樹(名古屋大学) ・「連用節への換言を介した連体節英訳手法の開発」 佐良木昌(明治大学)、原田康也(早稲田大学)、森下美和(神戸学院大学) ・「手話-日本語同時通訳における論理展開の伝達」 白澤麻弓(筑波技術大学)
16:50 -17:20	<b>A-5</b> 「サイトラ研究の基盤整備(サイトラ研究プロジェクト経過報告)」 石塚浩之・辰巳明子(広島修道大学)、稲生衣代・水野的(青山学院大学)、長沼美香子・船山仲他・畑上雅朗(神戸市外国語大学)、山田 優(関西大学) (司会:河原清志)	<b>B-5</b> 「意味論的誤訳—機械翻訳の事例を通じて—」 NGUYEN THANH TAM (Research Fellow, Kobe University) (司会:立見みどり)	<b>C-5</b> “Value Appraising and Translator Style: An analysis of Swedish to Japanese translations of the crime novel Roseanna using Appraisal Theory” Michael Bengtsson (Rikkyo University M) (司会:田辺希久子)	
17:40 -19:40	キャンパスレストラン APPETIT(アペティ)  <b>懇親会</b> ※懇親会会費(一般 4,000 円 学生 3,000 円)は当日、受付でお支払いください。			

第 2 日(9月 10 日)

	L701 <b>A会場</b>	L702 <b>B会場</b>	L703 <b>C会場</b>	L704 <b>D会場</b>
9:30 -10:00	<b>A-6</b> 「『通訳ワークショップ』2017 年度授業実践報告」 山崎美保(関西大学、神戸学院大学) (司会:瀧本真人)	<b>B-6</b> 「司法通訳人の『説明責任』と通訳教育:2016 年米国で結審した 2 つの判決からの考察」 田村智子(国際基督教大学) (司会:内藤 稔)	<b>C-6</b> 「『ナカタさん(『海辺のカフカ』)の変った話し方は英語でどのようにに翻訳されるのか」 山木戸浩子(藤女子大学) (司会:坪井陸子)	<b>D-6</b> 「日本語言語学的ユーモアの翻訳規範について:『吾輩は猫である』を例に」 王 夢蕾(筑波大学大学院) (司会:古川典代)
10:10 -10:40	<b>A-7</b> 「翻訳通訳教育におけるサービスマーケティングの機会と課題」 武田珂代子・戸井田慶子(立教大学)、橋本理沙(立教大学 M) (司会:瀧本真人)	<b>B-7</b> 「要通訳刑事司法手続きにおける英語の使用及びその再検討の必要性に関する一考察」 ヤコブ・E・マルシャレンコ(名古屋外国語大学大学院(博士候補生)) (司会:内藤 稔)	<b>C-7</b> 「『不思議の国のアリス』再翻訳テキストによる日本文学翻訳史の検討」 行田英弘(無所属) (司会:坪井陸子)	<b>D-7</b> 「ハード・ゴールドブラットの翻訳観と実践—莫言小説『生死疲労』を中心に—」 ニイ ウエイ(常葉大学) (司会:古川典代)
10:50 -11:20	<b>A-8</b> 「実践報告:日本語の特徴を和訳に生かすための OJT 教材—平易で端的な導入編として」 北村富弘(法務省大阪刑務所国際対策室) (司会:瀧本真人)	<b>B-8</b> 「日本の法廷通訳におけるタイ語の一人称と文末詞の使用に関する調査」 スッカスイ・ベンチャラット(立教大学大学院 M) (司会:内藤 稔)	<b>C-8</b> 「女性向けの翻訳・非翻訳テキストの文体比較:定量分析とアンケートによる受容研究を通して」 古川弘子(東北学院大学) (司会:坪井陸子)	<b>D-8</b> 「日中連体修飾節構文の対応関係と翻訳規則—『内の関係』の連体修飾節を中心に—」 谷 文詩(筑波大学 D) (司会:古川典代)
11:30 -12:00	<b>A-9</b> 「逐次通訳クラスにおけるスマートフォンを活用」 西畑香里(東京外国語大学) (司会:瀧本真人)	<b>B-9</b> 「対話通訳における通訳行為のなりたちについての考察—新生児訪問模倣通訳の会話分析から—」 飯田奈美子(立命館大学客員研究員) (司会:内藤 稔)	<b>C-9</b> 「歌詞翻訳における翻訳スタイルの考察—ディズニー映画の挿入歌の分析から—」 野田和花(東京外国語大学 M) (司会:坪井陸子)	<b>D-9</b> 「ウェブニュースの中日翻訳における文の区切りと文の繋がり」 李 正政(広島大学 D) (司会:古川典代)

12:00 -13:30	昼食・休憩		L601 理事会	L704 「院生フォーラム」 院生有志による自主セッション (司会: 田村智子)
	L701 <b>A会場</b>	L702 <b>B会場</b>	L703 <b>C会場</b>	L704 <b>D会場</b>
13:30 -14:00	<b>A-10</b> 「中国語の声調学習におけるシャドーイング練習法の効果—連続単語シャドーイング練習法を用いた実践研究—」 張 文青(広島大学D) (司会: 水野 昶)	<b>B-10</b> 「プロ野球球団通訳者の役割」 板谷初子(北海道武蔵女子短期大学) (司会: 吉田理加)	<b>C-10</b> 「日本における韓国絵本翻訳—『とらはらパーティー』と『天女銭湯』の方言翻訳を中心に—」 尹 恵貞(一橋大学D) (司会: 佐藤美希)	<b>D-10</b> 「翻訳教育と異文化理解: アラビア語から日本語への字幕作成を例として」 ワリード・イブラヒム(カイロ大学) (司会: 長沼美香子)
14:10 -14:40	<b>A-11</b> “Efficacy of Sight Translation in English-Japanese Consecutive Interpreting: The Effects of Simultaneous Visual Input Versus Consecutive Aural Input” Hiroko Yamada (Kansai Gaidai College) (司会: 水野 昶)	<b>B-11</b> 「オリンピック・パラリンピックにおけるボランティア通訳の役割—ロンドン、ソチ、リオ大会の実例をもとに—」 西川千春(目白大学)、坂本真実子(ポルト大学D) (司会: 吉田理加)	<b>C-11</b> 「通訳・翻訳技能とテクノロジーが可能にした新しい翻訳実践: ポール・マッカートニーのコンサートを例に」 松井祐実(立教大学M修了生) (司会: 佐藤美希)	<b>D-11</b> 「日英語、ア日語の比喩の意味理解とその翻訳法—慣用的比喩表現を事例に—」 上川 アルモーマンアブドゥラ(東海大学) (司会: 長沼美香子)
15:00 -17:00	L706 特別企画 愛知大学言語学談話会共催 公開シンポジウム 「オリンピック・パラリンピックにおけるボランティアの参画と役割」 講師 塚本博氏(JOA 会員/上毛新聞社編集局) 講師 鶴田知佳子(東京外国語大学教授) 司会 武田珂代子(立教大学教授)			

- 研究発表は、発表 20 分＋質疑応答 10 分です。質問は発表内容に直接関連したことについてのみ、手短に行うものとします。質問者の単なる意見の陳述はご遠慮ください。
- 各発表間の 10 分間は、出入室のための時間です。移動はすみやかにお願いします。
- 発表スケジュールにある (M)・(D) は、それぞれ発表者が博士前期課程(修士課程)、博士後期課程の学生会員であることを示します。
- L705教室は休憩室として開放しています。ご自由にご利用ください。

大会期間中は学内の無線 LAN にアクセスできます。必要に応じてご利用ください。

SSID: guest

ID: jaits18

Pass: wifi9899a

発表者の皆さんへ：

- 研究発表で使用する教室には、プロジェクタに接続された PC (Windows 7) が用意されています。PC には PowerPoint 2013 がインストールされていますので、USB メモリ等でデータをご持参ください。機材をご自身で持ちこんでいただいても構いませんが、その際には、必要となるケーブルのご準備も合わせてお願いいたします。
- PC 等の不具合に備えて、配布資料のご準備を推奨しています。ご自身で必要部数(40 部程度)をご準備いただき、当日ご持参ください。教室での配布については、必要に応じて会場スタッフがお手伝いをいたします。
- ポスター発表で掲出するポスターは、各自で印刷したものを当日ご持参ください。掲示スペースは、可搬式ホワイトボード(板面:縦 860mm × 横 1160mm、A0 サイズ横向き)1 枚です。
- 発表の内容に関して、個人情報や守秘義務、二重投稿／二重発表、無断引用などには十分ご注意ください。

[第 18 回年次大会実行委員会]

石原知英(愛知大学／大会実行委員長)、中村幸子(愛知学院大学／副委員長)  
ビロドー・イザベル(愛知淑徳大学)、加藤久佳(愛知工業大学)、クマイ恭子(名古屋大学 D)

[プログラム委員会]

坪井睦子(順天堂大学／委員長)、武田珂代子(立教大学／副委員長)

## 交通アクセス

会場：愛知大学 名古屋キャンパス



### 愛知大学名古屋キャンパス

(愛知県名古屋市中村区平池町4丁目60-6)

詳しい地図はこちら <https://goo.gl/maps/YfAaP>

JR名古屋駅から徒歩約10分(桜通口を出て名駅通りを南下)  
 あるいは名古屋駅であおなみ線に乗り換えて1駅「ささしまライブ駅」下車  
 (ささしまライブ駅からは歩行者デッキで直結しています。)

第 1 日(9 月 9 日) 10:30-12:00

L706 教室

### 基調講演

## **An Empirical Study on Consecutive Notes and Notetaking\*** **Prof. Yasumasa Someya (Kansai University)**

### Abstract

In this lecture, I will report on the results of a small-scale experiment on notetaking in consecutive interpreting. In Someya (2005), I proposed what I called the Propositional Representation Theory of Consecutive Notes and Notetaking (or, the PRT for short). The PRT is built on an assumption that interpreters' notes are a reflection of their "understanding" of the target text, and that the notes supported by a sound understanding on the part of interpreters "should have a certain systematicity and underlying structure behind the seemingly random configuration of scribbled letters and symbols" (Ibid., p.2). In other words, interpreters' notes, according to the PRT, are not a result of fortuity; they are taken as they are for a reason, and with good reason for that matter. The main claims of the PRT, as its name suggests, are that the basic unit of a text and text comprehension and, therefore, of consecutive notes (hereinafter, NTs) is the proposition and that NTs are constructed "as a Dynamic Propositional Network (aka, DPN), in which the target text is represented as a chain of propositions whose configuration at any given time changes along with the unfolding of the target text" (Ibid., pp.11-12).

The arguments put forth in Someya (2005), admittedly, are purely theoretical without any empirical evidence to support his claims, although they are also based on his personal experience and observations on other professional interpreters at work. The experiment to be reported in this lecture presentation was conducted as a follow up of my 2015 study in an attempt to find hard evidence to substantiate my theoretical arguments. More specifically, the research questions to be addressed in this experiment are as follows:

**Q1.** Is the "text-based" (therefore "shallow") information processing really the norm in consecutive interpreting as it is suggested in Someya (2005)? (The claim obviously goes against the famous and seemingly unchallengeable principle, if not doctrine, of "Note ideas rather than words" (Roza, 1958).

**Q2.** Are consecutive notes actually taken on a propositional basis as claimed in Someya (2005)?

**Q3.** Is the Thematic P-A Scheme proposed in Someya (2005) compatible with, or can it account for, actual notes taken by professional interpreters?

**Q4.** Does "deverbalization" (Seleskovitch, 1975; Seleskovitch & Lederer, 1995) actually occur and, if it does, under what conditions and/or circumstances, and how prevalent is it?

After presenting my answers to the above RQs, I will also talk about pedagogical implications of the PRT, including some practical teaching methods that are proven effective (Someya, 2013), as a conclusion of my talk.

### References

- 染谷泰正 (2005) 「通訳ノートテイキングの理論のための試論——認知言語学的考察」『通訳研究』第 5 号 (pp. 1-29).
- 染谷泰正 (2013) 「通訳ノートテイキングの指導法～理論に基づく体系的指導法を目指して～」日本通訳翻訳学会第 14 回年次大会における口頭発表 2013 年 9 月 7 日. 於神田外語大学.
- Someya, Y. (2017) . An Empirical Study on Consecutive Notes and Notetaking. In Someya, Y. (2017), *Consecutive Notetaking and Interpreter Training*, Chapter 6 (pp. 191-239). Routledge.

Someya, Y. (2017). A Propositional Representation Theory of Consecutive Notes and Notetaking, In Someya, Y. (2017), *Consecutive Notetaking and Interpreter Training*, Chapter 5 (pp. 147-190). Routledge. 染谷 (2005)の改訂英訳版.

\*This lecture is based on a paper included in Chapter 6 of *Consecutive Notetaking and Interpreter Training* by Yasumasa Someya (2017). Some new data and arguments not included in the book, however, will also be introduced in the lecture.

### Speaker's Brief Bio



Yasumasa Someya (born August 26, 1950) is a graduate of the University of Waterloo, Ontario, Canada, where he majored in Urban and Regional Planning. After more than ten years of business experience both in Japan and abroad, he attended the Graduate School of the University of Tokyo, where he earned his Master's degree in Language and Information Sciences. He started his teaching career in 2002 at Aoyama Gakuin University, Tokyo, where he spent seven years teaching interpreting, translation, and business communication among other subjects. He then moved to Kansai University in 2010 to set up a Translation and Interpreting Program at the Faculty of Foreign Language Studies and also at the Graduate Division of Foreign Language Research and Education. He is one of the founding directors of the Japan Association of Interpreting Studies (currently the Japan Association of Interpreting and Translation Studies), and was also the editor-in-chief of the Association's official journal for eight years since the year 2000. His recent publications related to T&I include the following:

Someya, Y. (2017) (ed.) *Consecutive Notetaking and Interpreter Training*. Routledge.

染谷泰正 (2012) 「同時通訳はなぜ可能なのか～同時通訳の認知・言語学的メカニズム」 関西大学外国語学部紀要第6号, pp. 85-118.

染谷泰正 (2011) 「英語教育におけるプロダクション訓練の方法論とその理論～インプットからアウトプットへの橋渡し」 関西大学外国語学部紀要第5号, pp. 93-132.

染谷泰正 (2010) 「大学における翻訳教育の位置づけとその目標」 関西大学外国語学部紀要第3号, pp.73-102.

### 司会

山田 優(関西大学教授)



第 2 日(9 月 10 日) 15:00-17:00

L706 教室

### 特別企画

愛知大学言語学談話会共催 公開シンポジウム

#### 「オリンピック・パラリンピックにおけるボランティアの参画と役割」

講師: 塚本博氏(日本オリンピック・アカデミー(JOA)会員/上毛新聞編集局)

鶴田知佳子会員(東京外国語大学教授)

司会: 武田珂代子(立教大学教授)

#### 概要

塚本 博

#### 「スポーツボランティアの意義と課題」

自身がボランティア参加したスポーツ大会のなかで、特に長野冬季オリンピックを例にお話します。約3万2千人のボランティアが活躍した70超におよんだ業務を簡単に紹介。単なる「無償の労働力提供」ではなく、貴重なスタッフだったことを強調します。ボランティアを経験しての楽しみも披露。また、ボランティアは語学力のある人から優先的に採用されましたが、現場では語学力だけではなくチームワークが不可欠でした。年配者や他のスキルを持った人とも協力していくことの大切さを体験談を交えて説明します。

鶴田 知佳子

#### 「東京外国語大学リオオリンピック・スタディツアーの運営経験をもとに 東京オリンピックの際の言語ボランティア活動を展望する」

東京外国語大学の短期海外留学授業の一つ「スタディツアー」として企画された「リオオリンピック・スタディツアー」オリンピックに17人、パラリンピックに9人がボランティアとして参加した。事前学習においてオリンピック用語、通訳の心構えと通訳ロールプレイなど、研修を行った。学生はオリンピック村やメインプレスセンターなどの施設、競技会場に配属され、それぞれの配属先で英語を使ってのコミュニケーションに貢献した。報告会においては、多国籍で働く中で自ら積極的に動くことの大切さ、国際的な場で英語を使って仕事をする自信を得たなど、成果があげられた。ボランティア参加者が大会現場で得た経験こそが教室の中の授業ではおしえることの出来ない貴重な糧である。

#### 講師紹介

##### <塚本 博(つかもと ひろし)>

1964年10月14日生まれ。52歳。群馬県高崎市在住。東洋大学卒業後、上毛新聞社入社。現在、編集局編集部で紙面構成担当の「整理記者」を務める。98年の長野冬季オリンピックからスポーツボランティアを始める。以降、サッカーW杯(02年)、青森アジア冬季大会(03年)、世界陸上大阪大会(07年)、埼玉スタジアムやエムウェーブの各種試合などに参加。スポーツボランティアグループ「バインドエイド」メンバー。

##### <鶴田知佳子(つるた ちかこ)>

東京外国語大学総合国際学研究院教授。2016年夏学期開講、リオオリンピック・スタディツアー主宰。

1 日目 A 会場 (L701) 14:00 – 14:30

司会 石塚浩之

A-1

### トランプ大統領を通訳する

鶴田知佳子(東京外国語大学)

2016年にアメリカ大統領選挙で大方の予想を裏切ってトランプ大統領が誕生した。伝統的な政治家ではない、ワシントンのインサイダーではない人物を選びたい、閉塞感を払拭したいという国民の期待が上回った形である。しかし、政治経験がまったくなく、人気テレビ番組の司会者をしていたといことでマスコミ操作のやり方は心得ている、きわめて型破りで従来の政治家の話し方とは正反対のような話し方をする大統領が誕生した。それは、同時に大統領のことばを伝える責務を負っている同時通訳者には、今までとは違う政治家ではない大統領の演説の通訳を強いることとなった。

本発表では、具体的にどこが通常の大統領のスピーチスタイルと違っていて、どのような工夫が必要であるのか、明らかにするとともに放送通訳においてどのように一般視聴者向けに訳出をしているのか、トランプ大統領の話し方の三大特徴についてはどのように対応しているのかを明らかにする。

話し方の特徴としては、①言葉の使い方特に形容詞において品格に欠けている場合が多く単純な語彙を繰り返し使用、②文章が短く不完全な場合が多い、③脈絡なく思いついたことを述べるために話の展開が論理的によめないことがあげられる。

- ① については、単純な語彙のくりかえしであってもそれが曖昧語であった場合には訳出を固定するのではなくて、意味を伝えるようにせねばならない
- ② 文章が短く不完全な場合には、前後の脈絡から推測が必要となる
- ③ 話の展開が読めない場合には予測をするというテクニックが使えないため原文を追うのに遅れがちになる

などの難しさがある。

本発表者は、具体例を上げながら現場でどのように通訳者が対応しているのか、世界的に注目を集めるアメリカ大統領が行う演説をリアルタイムで同時通訳をする際にどのような工夫がされているのか、倫理的な面の考慮も検討にいれながら紹介する。

1日目 A会場 (L701) 14:40 – 15:10

司会 石塚浩之

A-2

同時通訳の訳出単位と訳出方略—オバマ米国元大統領広島演説の放送同時通訳をめぐって

河原清志 (関西大学)

本発表は同一の起点言語発話に対する複数の同時通訳を比較することによって、同時通訳の訳出単位と訳出方略の関係について分析することを目的とする。

一般に認知的制約の大きい同時通訳では、両言語の統語構造の違いや限定的な作動記憶容量を乗り越えるために様々な方略が採られる。先行研究は多種あるが、訳出単位との関係では①即応方略と②遅延方略を議論の俎上に載せると有効である。この2つの方略と具体的訳出方略との関係の仮説として以下が考えられる。①では短いチャンクごとに処理してゆくと、認知的負担が比較的少なくて済む。但し情報が不十分な状態での訳出開始が多くなり、訳出開始を誤ったり、誤訳のリスクが高くなったりする。またチャンクごとのつながりが不自然になりやすい。従ってこのような短所を克服するために「修復」「つなぎ」などの技法が用いられる(なお、統語的再構成方略)。他方②では、待ち時間(情報量)に比例して認知的負担が高くなる。但し情報が比較的十分にある状態で訳出にかかれるため、より正確かつ自然な通訳ができるようになる。従ってこのような認知的負担を軽減するために「省略、圧縮、言い換え、代用」などの情報編集方略が用いられる。

以上の仮説を洗練させるために、水野(2015)が暫定的結論として導出している、(a) 注意の焦点内に容量以上の項目を保持すると後続部分を中心に何らかの影響が及ぶこと、(b) 構造的に非対称な言語間の同時通訳では作動記憶の制約から生じる過負荷を回避するために統語的再構成方略を採ること、と上記①②の方略との関係をも分析項目とする。

以上の検証を行うために、オバマ米国元大統領広島演説(2016年5月27日)に対する6種類の日本語による同時通訳(テレビ放送通訳、原稿なし)を分析対象にした。(放送通訳というジャンル特性—訳出率の抑制、文化差の回復、明示化、レトリック調整等—も考慮した分析を行った。)詳細な結果は発表に譲るが、保持された命題の保存率を基準にしつつ、(i) 情報編集方略(省略、圧縮、言い換え、代用等)(ii) 統語的再構成方略(順送り処理、修復、つなぎ等)の採用率と、①即応方略・②遅延方略の関係を明らかにしつつ、「最小チャンク保持方略」「最小逆行統合方略」における訳出単位が①と②とで具体的にどの程度異なるかについて説明する。

#### 【参考文献】

水野的(2015)『同時通訳の理論』朝日出版社

1 日目 A 会場 (L701) 15:20 – 15:50

司会 石塚浩之

A-3

### 視聴者に「親切的」放送同時通訳とその限界

畑上雅朗 (通訳者、神戸市外国語大学非常勤講師)

一般的に、金融専門チャンネルなどを除く放送通訳や、専門家ではない人たちが聴衆の講演会など一部の会議通訳では、訳出に工夫が求められることがある。時事問題や当該分野に詳しくない視聴者や聴衆でも理解できるようにするためだ。工夫すべき場面は多様だが、ここでは非常に単純な例を挙げると、“Brexit”は「ブレグジット」でも、もちろん間違いではないが、一度は「ブレグジット＝イギリスのEU(ヨーロッパ連合)からの離脱」などとする方が、「ブレグジット」と聞いてすぐにピンと来ない人には親切だろう。そしてこれが放送通訳でも全訳もしくは詳しいメモが書けるほど準備時間が十分ある時差通訳の場合や、会議通訳でも逐次通訳ならば、「親切的」言い方を用いても、一定レベル以上の通訳者にとってはその後の訳出に大きな影響はないと思われる。

問題は、放送通訳でいうならば同時通訳もしくは準備時間のごく短いセミ同通のときに、どこまで一般視聴者に「親切的」表出にすべきかである。つまり先ほどの例ではBrexitを親切だが長々とした「ブレグジット＝イギリスのEU(ヨーロッパ連合離脱)」などよりも「ブレグジット」のみで通す方が、同通が話し手に追いつかなくなるなど、その後の訳に及ぼすリスクは小さいと考えられる。しかし「ブレグジット」の意味を知らない視聴者には不満が残りがねない。とはいえ、通訳や翻訳の基本はあくまでも必要な情報を網羅した正確な訳であり、いくら素人にもわかる「親切的」表現を使っても、基本が欠けていては本末転倒になりかねない。

そこで実際に特定分野の専門家を視聴者に想定していない、かつリアルタイムで通訳をつける、いわゆる国際ニュースチャンネルのBBCやCNNなどの放送同時通訳者はどこまで素人に「親切的」訳出をしているのか(あるいはしていないのか)。また、「親切的」表現に気を使ったがために、その後の訳にどんなマイナスの影響が出かねないか(あるいは専門家向けのような「親切でない」表現ですませることが、その後の訳出上、どうプラスに働きうるのか)、実例を分析する。通訳ならびにジャーナリズムの基本原則を改めて確認し、その原則とのバランスを保つために、聞き手にとってすんなりと耳に入る工夫をすることにより発生しうる訳出への影響はどこまで許容されるのかを考察することで、より適切な放送同通につなげていきたい。

1 日目 A 会場 (L701) 16:10 – 16:40

司会 河原清志

A-4

#### 聞き手の視点から見た同時通訳と逐次通訳

新崎隆子(東京外国語大学大学院)

この発表では昨年5月に生放送された日米首脳共同記者会見の逐次通訳と同時通訳を、聞き手の視点から比較し、通訳の有用性を論じる。Wadensjö (1998) は通訳を介したコミュニケーションを「話し手」「聞き手」「通訳者」の相互作用と捉え、「コミュニケーションにおける3人の踊り」“Communicative pas de trois” と表現した。実際に通訳が行われる場面では、通訳は原発言の内容や話し方の影響を受け、通訳の評価は聞き手の受け止め方に依存する。「話し手」と「聞き手」が通訳の専門家であることはほとんどないにもかかわらず、これまでの通訳研究の焦点は原発言がどのように通訳されるかに置かれ、「話し手」はある程度視野に入っているものの、「聞き手」がどのように受け止めているかについてはあまり注目してこなかった。通訳の評価は通訳実務や教育に従事する通訳の専門家によって行われることが多く、専門家ではない「聞き手」の視点は研究の範囲から抜け落ちている印象がある。

通訳の利用者は同時通訳と逐次通訳の有用性をどのように捉えているのだろうか。Gile (2001) は正確性 (accuracy) の視点から比較したが、評価者は通訳の専門家だった。またこの研究では音声ではなく書き起こした通訳文を分析しているために、実際の通訳評価の条件とかけ離れている。

同時通訳と逐次通訳への評価を比較する際は、通訳の質が「話し手」の話の内容や話し方、通訳者の技術レベル、「聞き手」の関心レベルなどに左右されるため、それらの条件を統一した環境で行うことが望ましい。今回は、放送で生中継された同じスピーチを第一級レベルの通訳者が行った同時通訳と逐次通訳を入手し、8人の一般視聴者を対象とした調査を実施することができた。調査の結果、内容の理解、デリバリー、原発言への忠実性のすべての項目で逐次通訳が同時通訳を上回ったが、評価には個人差があることや、点数には表れない質的な受け止め方の差も明らかになった。この調査に加え、長年に亘って通訳教育を受け実務経験のある5人の通訳専門家による評価も調べた。発表では通訳の利用者と専門家による評価を比較し、逐次通訳と同時通訳の有用性について議論したい。

1 日目 A 会場 (L701) 16:50 – 17:20

司会 河原清志

A-5

#### サイトラ研究の基盤整備 (サイトラ研究プロジェクト経過報告)

石塚浩之・辰己明子 (広島修道大学)、稲生衣代・水野的 (青山学院大学)、長沼美香子・船山仲他・畑上雅朗 (神戸市外国語大学)、山田優 (関西大学)

本発表は 2015 年度より始まった「サイトラ研究プロジェクト」の経過報告である。サイト・トランスレーション (以下、サイトラ) は通訳関係者には広く知られている反面、まとまった研究は世界的にも少なく、今後の理論化が必要な分野である。本プロジェクトでは、メンバーの連携の下、サイトラ研究の基盤をなすことが期待される複数の研究を進めている。今回の発表では、以下の 3 点に絞り、研究プロジェクト 2 年目の成果を報告する。

#### 1. サイトラの分類

サイトラの具体的作業は場面により異なり、その活用や応用の可能性としては、原稿付き同時通訳、通訳の事前準備、通訳訓練、視聴覚翻訳 (AVT)、英語教育での「訳読」などが含まれる。また、サイトラと類似する訳出行為として、スラッシュ・リーディングや順送りの訳などもある。本発表では、これらの多様な概念の整理を試みる。

#### 2. サイトラの訳出方略と情報構造

情報構造は意味の一部である。サイトラの訳出方略を導入することで、文学作品も情報構造を損なわずに訳出することができる。本発表では小説の訳例を使用し、情報構造の観点から、サイトラの訳出は制約下の方便としての次善策ではなく、テキストの意味を適切に表現し、同時に読者に余分な認知的負荷を与えずに伝達し得る望ましい方法であることを示す。

#### 3. サイトラのプロセスモデル

同通訓練としてのサイトラに焦点を当て、サイトラの認知プロセスについて考察する。研究の出発点として、分析データは各メンバーの内省により作成し、共通テキストからの複数の訳出データを得た。分析に当たっては質的手法を採用し、このデータに見られる個人間の差異と共通点を手がかりとし、サイトラ認知のプロセスを推定した。本発表では、暫定的結論として、サイトラのプロセスを分割・保持・組換えの 3 面からなるモデルとして提示する。

なお、当日の発表では、本プロジェクトの総括として最終年度に予定されている実証、応用、調査についても予告する。

#### 【参考文献】

長沼・船山・稲生・水野・石塚・辰己「サイト・トランスレーション研究の可能性」『通訳翻訳研究への招待』16, 142-162.

2 日目 A 会場 (L701) 9:30 – 10:00

司会 瀧本真人

A-6

「通訳ワークショップ」(2017 年度)授業実践報告

山崎美保 (通訳者、関西大学・神戸女学院大学)

関西地方のある私立大学(以下、K 大学)において筆者が担当している「通訳ワークショップ」の授業について報告する。本授業は、K 大学における「通訳翻訳プログラム」の履修者で、3 年次において通訳プログラムの関連授業を履修済みの学生を主な対象に、英日・日英の実践的な通訳訓練を行うことを目的とした半期完結型の授業である。授業の到達目標としては、「逐次通訳の基本的なスキルを習得するとともに、とくに専門的でない内容の素材について『ほぼ十分な』レベルで英日逐次通訳ができること」、および「英語と日本語の双方にわたる高度な言語運用力およびコミュニケーション能力を身に付ける」ことの 2 点が挙げられている。

授業は、「通訳ワークショップ」という名称のとおり、実践的な訓練が中心で、以下の 4 つのタイプの演習を適宜組み合わせで行っている。なお、中心となるのは逐次通訳であるが、同時通訳も排除していない。

- 「通訳訓練データベース」に収録されている課題を使った基礎通訳演習
- 日英のサイトトランスレーション練習
- ピアスピーチ通訳演習(新聞記事などをもとに即興スピーチを行い、これを他の学生が交互に通訳する形式)
- 学内外のゲストスピーカーを招いて行う通訳実践訓練

本授業の担当は今年で 3 期目であり、筆者が考える前回までの授業からの改善すべき主な点は以下のとおりであった。

- 学生特有の言葉遣いをせず、公式な場で使用可能なフォーマルな言い回しができるようにすること、および聴者が理解しやすい用語選択ができるようにすることで、通訳に自信を持たせる。
- 通訳の評価を講師だけがするのではなく、学生たちがお互いに行うことで評価に慣れ、各自が自分の改善点を洗い出し、パフォーマンスの改善につなげられるようにする。

今期は前述の履修条件を徹底し、受講人数を制限したため、英日だけでなく日英の基礎通訳演習、日本語の音読、同時通訳演習などが上記の課題に加えて時間的に可能になり、まだ学期半ばではあるが、当初通訳に自信がなく、途中で黙り込んでしまっていた学生や、同時通訳のスピードになかなかついていけなかった学生のパフォーマンスに大きな改善が見られ、講師として手ごたえを感じている。本発表では具体的にどのような点で改善が見られたかを報告しながら、実際の授業の進め方、およびそれぞれの授業実践の中で筆者が感じたこと等について、通訳教育法論という観点から言及しながら、よりよい授業実践に向けてフロアの皆様と知見を共有できればと考えている。

2日目 A会場 (L701) 10:10 – 10:40

司会 瀧本真人

A-7

### 翻訳通訳教育におけるサービラーニングの機会と課題

武田珂代子・戸井田慶子(立教大学)、橋本理沙(立教大学大学院博士前期課程)

サービラーニングは体験的学習法のひとつで、学生が、教室で習得した知識やスキルをコミュニティー(地域社会)の課題に取り組む活動に活用することによって、(1)知識やスキルを現実社会で実践できるものに転換する、(2)キャリア形成の計画に役立てる、(3)コミュニティーへの貢献を通して自らの社会的役割や市民としての責任を認識する、などの教育的効果があるとされている。鍵概念として「振り返り」や「評価」、またサービスを提供する側と受ける側の「互惠性」などが挙げられるのは、サービラーニングが単なる奉仕活動ではなく教育活動であることの表れだ。

翻訳者・通訳者養成においても、サービラーニングは教育活動の一環だという原則を徹底させることが望まれる。実際のプロジェクトに取り組ませることは、学生の主体的学習を求める社会構成主義的アプローチ(Kiraly, 2000)や、翻訳者・通訳者としての「社会化」プロセスを強調するアプローチ(Sawyer, 2004)において推奨されてきた翻訳通訳教授法だ。しかし、翻訳者・通訳者は高度な専門職だという自覚を学生に持たせ、また、医療通訳などの現場でボランティアが多用される現状を助長させない意味で、学生に無償で翻訳通訳業務をさせることに抵抗する考え方もある。したがって、翻訳通訳プログラムにおけるサービラーニングでは、カリキュラムとの関連性、適切な業務の見極め、監督体制、振り返りと評価、ユーザー側の要件などを網羅するガイドラインを確立し、慎重に実施する必要がある。

本発表では、まず、翻訳通訳教育におけるサービラーニングの機会と課題の可能性を述べ、実施のための基本的アプローチとガイドラインについて論じる。次に、立教大学で昨年立ち上げた「立教コミュニティー翻訳通訳(RiCoLaS)」プログラムの実施状況について報告する。具体的には、プロジェクトの内容、チーム構成、トレーニング、ユーザーのフィードバック、振り返りの内容などを紹介する。最後に、プロジェクトマネージャー、通訳者、翻訳者として、さまざまなプロジェクトに参加してきた学生が、参加学生全員からのフィードバックをまとめ、報告する。特に、準備や現場で突発的に起こる問題への対処能力の涵養に言及する。

#### 【参考文献】

Kiraly, D. (2000). *A Social Constructivist Approach to Translator Education*. Manchester: St. Jerome.

Sawyer, D. (2004). *Fundamental Aspects of Interpreter Education*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.



2日目 A会場 (L701) 10:50 – 11:20

司会 瀧本真人

A-8

実践報告: 日本語の特徴を和訳に生かすための OJT 教材—平易で端的な導入編として

北村富弘 (法務省大阪刑務所国際対策室)

矯正業務における書簡翻訳には日本語らしい和訳が求められるところ、新任翻訳者や経験の浅い翻訳者による訳文には担当言語の特徴が強く現れることがしばしばある。そこで日本語の特徴について、翻訳者自身において振り返り、訳文を検討することができるよう OJT 用教材冊子を作成した。

内容は、①翻訳学、対照言語学、日本語学等を参照しつつも、そういった専門的知識がなくとも理解できるものとし、なおかつ②トピックごとに平易な対訳例に端的な説明を加えたページ構成をとった。例文には主に英語、日本語を上げているが、中国語ほか他の言語担当者でも日本語の特徴について振り返ることができるよう配慮した。

掲載したトピックは、これまでの OJT で指導頻度の高いものを選んだ。具体的には、『日本語の特徴1 (人に関する表現の仕方)』として、「人を指す言葉」、「待遇表現」、「動作主が目立たない表現」、「受身文」等、『日本語の特徴2 (事実の表現の仕方)』として「呼応副詞・先行マーカ」、 「伝達表現・知覚表現」、「動作表現と状態表現」、「無生物主語の和訳」、「主題と題述」等を取り上げている。

こういったトピックは、熟練した翻訳者にとっては「日本語にすれば自然にこうなる」と感じられる部分でもあり、とくに説明されないこともあるが、経験の浅い翻訳者に対して、このような日本語としてごく基本的な特徴をあえて言語化し、振り返りを促すことで、訳文の改善につながることをねらっている。

本教材ではトピックごとに説明を完結しているが、『日本語の特徴2』の後半になるにつれ、日本語の大きな特徴であるナル言語としての性質、及び、主題と題述という文の捉え方が理解できるよう、それ以前のいくつかのトピックで提示する内容が予備知識となるように教材全体を構成している。

本発表では、同教材の概要を示すと共に、日本語のナル言語としての特徴、および主題と題述という表現形式の特徴について、各トピックの解説を用いながら順に翻訳者に気づきを促していく手順を紹介する。

2日目 A会場 (L701) 11:30 – 12:00

司会 瀧本真人

A-9

### 逐次通訳クラスにおけるスマートフォンの活用

西畑香里 (東京外国語大学)

本発表では、2016年秋学期実施の東京外国語大学の逐次通訳演習クラスで、スマートフォンを活用した事例を報告する。同年春学期に開講した逐次通訳演習クラス終了後に受講生を対象に実施したアンケート調査の中で、自宅学習ができる教材があってもよかったとの声を受け、また、スマートフォンを持っている学生がほぼ100%という状況で、スマートフォンを効果的に活用することはできないか検討し、授業に導入する試みを行った。

英語選択科目としての通訳クラスを導入する大学は増えており、通訳訓練を行うにあたっては、多くの大学で導入されているCALL(Computer Assisted Language Learning コンピューター支援言語学習)システムのある教室を使うことも多くあると考えられる。しかしながら、すべてのクラスがCALL教室を使用するとも限らず、実際に今回の対象クラスでは、設備としては前方のホワイトボードとモニター、移動可能な机と椅子のみの小講義室で授業を行った。語学学習に利用されるCALLシステムを利用する利点はあるものの、CALL教室が利用できない場合や、CALL教室を使うと個人学習になりがちでグループワークが行いにくい点などもある中、今回の試みにより、通訳クラスにスマートフォンを活用することの効果・利点を探ってみたい。

教材にはTEDトークのプレゼンテーションを使用した。TEDトークは、無料でのインターネット配信が2006年より行われており、日本でもテレビ番組で取り上げられ、知名度も高く英語学習に多く使われている。今回はその中からマット・カツの「30日間チャレンジ」を教材として選び、スマートフォンを使ったシャドーイングを始めとする基礎練習から、さらに逐次通訳演習のアクティビティにどのように発展させていったかを紹介する。また、学期末に受講生対象に行ったアンケート調査から、スマートフォンを活用することについての受け止め方のフィードバックも紹介し、通訳クラスでの教授法としての一考察としたい。

2 日目 A 会場 (L701) 13:30 – 14:00

司会 水野 的

A-10

**中国語の声調学習におけるシャドーイング練習法の効果—連続単語シャドーイング練習法を用いての実践研究—**

張 文青(広島大学大学院教育学研究科博士後期課程)

日本における中国語教育は、中国語の“音・形・義”の一体化学習が課題となっている中、とりわけ発音(声調)の習得は最大の難関である。中国語のアクセント“声調”は、一音節内でピッチ変動を有するタイプの“声調アクセント”であるが、一方、日本語のアクセントは、同一音節内で原則として高低変化を生じないタイプの“音調アクセント”である。そのため日本人学生にとって中国語の声調習得には、大量の発音練習が必要不可欠である。

“声調アクセント言語”である中国語のリスニング力の育成には、声調を正しく聞き取れることが習得の第一歩であると言える。リスニング力を伸ばすには、耳の敏感度や瞬発力、リズム感、語感などが必要とされている。シャドーイング練習法は、これらの能力を伸ばす効果があり、音韻表象の蓄積や口頭再生能力の向上、理解力の向上にも効果的であると報告されている(門田, 2012; 古川, 2005)。

シャドーイング練習法は、通訳トレーニングメソッドの一つとして知られ、英語や日本語教育における効果が多く報告されているが(門田, 2007; 迫田・松見 2005)、中国語の声調教育においては、まだ実践報告が見当たらない。

本実践研究は、連続単語シャドーイング練習法を用いて、中国語二文字単語の声調練習を行い、声調学習におけるシャドーイング練習法の聴覚と産出の両面に関しての有効性を検証することを目的としている。2016年秋学期に、中国語初級クラスで(対象者 22 名)8回の練習を行い、実施効果を分析した結果、声調の書き取りテストを用いた聴覚認知の事後テスト成績は、事前テストより明らかな改善が認められた。また、2017年春学期に、初中級クラスで(日本人学生及び留学生対象者 40 名)16回の練習を行い、事前・事後・遅延テストの測定を実施し、聴覚認知や発音産出の両面において、事後テスト及び遅延テスト成績は、事前テストより明らかな改善が認められた。発音産出時に、日本人学生や留学生における国別の特徴あるアクセントの改善も明らかであった。

本実践研究でシャドーイング練習法は、声調学習時の知覚認知に関する訓練法としての有効性と教育的示唆が得られたゆえ、中国語の教育現場でもこの練習法を活かすべきであると提言していきたい。

**【参考文献】**

門田修平 (2007) 『シャドーイングと音読の科学』 コスモピア株式会社

門田修平 (2012) 『シャドーイング・音読と英語習得の科学』コスモピア株式会社

古川典代(2005) 『中国語シャドーイング入門 聞くと話すと同時に身に付く』株式会社 DHC

迫田久美子・松見法男 (2005)「日本語指導におけるシャドーイングの基礎的研究②—音読練習との比較調査からわかること—」『日本語教育学会秋大会予稿集』

2 日目 A 会場 (L701) 14:10 – 14:40

司会 水野 的

A-11

### Efficacy of Sight Translation in English-Japanese Consecutive Interpreting: The Effects of Simultaneous Visual Input Versus Consecutive Aural Input

Hiroko Yamada (Kansai Gaidai College)

To date, interpreting studies have advanced understanding of characteristics of sight translation; however, little research has conducted comparative analysis between simultaneous rendition of visual input (sight translation) and consecutive rendition of aural input (consecutive interpreting). It is in this context that the present research attempts to empirically analyze the association of input processing by reading (sight translation) with input processing by listening (consecutive interpreting).

It is assumed that sight translation would facilitate the decoding process through the interaction with comprehension, semantics and background knowledge, which would be directly associated with enhancement of abilities in consecutive interpreting. On the other hand, given that the output process of sight translation undergoes a change of modes from reading source text to verbally translating it with the presence of written text, sight translation would be more visually interfered by the source language when translating it into the target language than consecutive interpreting. Thus it is assumed that sight translation and consecutive interpreting are different not only in their modes but also in their products.

In 2016, the author taught English/Japanese interpreting to the undergraduate students registered in an English interpreting course at the university during a fall semester. For the present research, intensive sight translation treatment was administered to one class for one hour out of consecutively three-hour lesson provided once a week, which accounts for fifteen lessons in total during the whole semester. Then the sight translation tests and subsequently consecutive interpreting tests, using the same source text, were conducted on the occasion of the mid-term and the final examination respectively. The present study first examines the effectiveness of intensive sight translation treatment. With respect to translation problems that prompt disruptions encountered during sight translation, major errors or deficiencies in rendering are identified, and then the strategies to solve the problems are analyzed. Next it reports how reading and orally outputting skills trained through sight translation activities are related to the enhancement of consecutive interpreting skills by comparing the products of sight translation and interpreting.

The data yielded salient information on the efficacy of sight translation practice, but showed no significant development in consecutive interpreting. Several exploratory analyses were carried out to compare the simultaneous rendition of visual input with the consecutive rendition of aural input, which suggest that the two are highly correlated in terms of products as well as abilities. This study may provide insight into the temporal characteristics of two distinct modalities by presenting lexical, syntactic, and strategic solutions for translation problems.

1 日目 B 会場 (L702) 14:00 – 15:10

#### B-1 B-2

##### コミュニティの現場を支援する翻訳通訳テクノロジー(翻訳通訳テクノロジー研究プロジェクト特別企画)

立見みどり (立教大学)、山田 優 (関西大学)、藤田 篤 (情報通信研究機構)、長瀬友樹 (株式会社富士通研究所)

「翻訳通訳テクノロジー研究プロジェクト」の目標の一つに、文理・産学を越えた議論と研究の促進がある。これまでの活動として、言語処理全般や機械翻訳の開発者を招待する会合を行ってきた。2016 年と 2017 年の言語処理学会では「文理・産学を超えた翻訳関連研究」および「翻訳の質と効率: 実社会におけるニーズと工学的実現可能性」と題したテーマセッションを実施し、翻訳研究者、自然言語処理研究者、実務翻訳者が議論・交流できる場を提供してきた。2016 年の本学会年次大会では「文理・産学を越えた翻訳関連研究: 端緒の議論と今後の展望」の発表で、それまでの活動と問題点を報告した。最終年度を迎えた本プロジェクトの活動の一区切りとして、本発表では「コミュニティ」の現場を支援する翻訳通訳テクノロジーの研究開発者を招き、その最先端の取り組みと、現場の問題、研究の必要性を議論する。発表内容は以下の通りである。

#### ①多言語音声翻訳技術の社会実装: プロジェクトの全体像と NICT における取り組み

藤田 篤 (情報通信研究機構)

訪日外国人や日本在住の外国人の増加に伴い、外国語話者と日本語話者がコミュニケーションを取る機会も急速に増えつつある。日常生活の様々なシーンにおいて「言葉の壁」を感じずに円滑なコミュニケーションを実現することを目指して、我々は、多言語音声翻訳技術を実用レベルで利用するための各種技術の研究開発、および社会実装に向けた実証実験を進めている。本発表では、翻訳エンジンの改善手法のうち、機械翻訳結果の品質の自動推定、機械翻訳対象文の自動前編集、多分野同時適応について紹介する。

#### ②医療機関における多言語音声翻訳機の臨床試験について

長瀬友樹 (株式会社富士通研究所)

概要近年様々な理由から病院を訪れる外国人患者が増加している。日本語が不得手な患者から正しい情報が入手困難な場合は診療・治療に悪影響を及ぼすことは容易に理解できる。この解決には医療通訳士の配置・利用が最も望ましいが、希少言語対応・時間外診療・患者利用頻度より、音声翻訳技術による解決も望まれている。今回、医療用多言語音声翻訳機の臨床試験(実医療者と実患者への適用)について、翻訳エンジンと音声翻訳端末の開発状況、利用者の反応、解決すべき課題と、今後の展望について説明する。

1 日目 B 会場 (L702) 16:10 – 16:40

司会 立見みどり

#### B-4

##### 「英語医療通訳入門」の授業報告—現状と課題—

三浦美恵子(国際医療福祉大学総合教育センター語学教育部)

国際医療福祉大学(大田原キャンパス)では、平成 27 年 4 月から「英語医療通訳入門」の授業を行っている。今年度(前期)の受講生は、理学療法学科、視機能療法学科、放射線・情報科学科に所属する 1 年生(計 18 名)であり、毎週金曜日の夕方に授業を行っている。前期の授業では、循環器科、呼吸器科、消化器科、代謝・内分泌科、救急・整形外科、泌尿器・腎臓内科、乳腺外科、脳神経科の 8 つの診療科について学習した。毎回の授業(90 分)の主な流れは、各診療科と関連のある語彙や表現について教科書と教員自作のプリントを使って学習してから、教科書のダイアログを使ったディクテーションを行い、その後学生 3 名 1 組のグループを作り、外国人患者・医療従事者・医療通訳者に扮してロールプレイを行うというものである。

15 回の授業のうち、2 回は本学の留学生に外国人患者役としてご参加頂き、日本人同士で練習するだけではなく、外国人を交えて通訳の訓練をする機会を設けている。期末テストは、筆記試験とロールプレイの試験から成る。筆記試験は、臓器の名称、病名、その他各診療科と関連のある語彙を中心に出题し、ロールプレイは、授業中に練習した 8 つの診療科に関するダイアログの中から学生自身が選んだ 1 つの診療科について行う。期末試験のロールプレイは外国人患者:留学生、医療従事者:教員、医療通訳者:日本人学生の 3 名で行い、英語→日本語、日本語→英語の通訳スキルに加えて、声量、アイコンタクト、患者に対する態度、患者役の留学生から頂いたコメントなどから総合的に評価している。

本授業の主な課題として、患者役の外国人を安定的に確保する難しさと受講生が 1 年生に偏る傾向が挙げられる。昨年は、8 名の留学生に患者役としてご協力頂いたが今年は 3 名だったため、学生 6 名に対して 1 名の留学生という少々練習しにくい状態になってしまった。また、受講生が 1 年生に偏る傾向は開講以来ずっと続いており、英語が苦手な学生も少なくないことから、とりわけロールプレイの評価が甘くなりがちである。この授業をよりよいものとするためには、授業の内容、使用する教科書、期末テストの在り方等も含め改善しなくてはならない点が沢山あると思われる。本発表では、国際医療福祉大学における英語医療通訳入門の授業報告をさせて頂くとともに、皆様からご意見を頂戴できれば幸いである。

1 日目 B 会場 (L702) 16:50 – 17:20

司会 立見みどり

## B-5

### 意味論的誤訳—機械翻訳の事例を通じて—

NGUYEN THANH TAM (神戸大学国際文化学研究所)

従来、誤訳は翻訳家・翻訳研究者にとって悩みであり、それを制限することは最優先の目的である。誤訳は単純に誤った翻訳だと定義できるだろうが、どのように誤ったか間違えたかは人々の感性によって異なり、客観的に評価し修正するには困難である。本研究の目的は誤訳の原因・種類・改善法を解明することにある。本研究は誤訳の真相を追究するために、語学から見ると最も根本的側面である意味論的誤訳を対象にし、検討する。意味論的誤訳とは言語表現のみを解釈することによって認識できる誤訳とする。さらに、意味論的誤訳は「意味が不明な訳」、「多義的意味が解釈できる訳」、及び「全く違う解釈を招く訳」に分類できる。事例として、原文の構文と字句を一对一の直訳のことにする機械翻訳を扱う。具体的には、ベトナム語及び日本語で書かれているソーシャル・ネットワーク (SNS) の文書を抽出し、機械翻訳で訳し、前述の分類に基づいて分析を行う。誤訳を克服する方法を検討する際に、多言語の翻訳法である重訳を提案することを試みる。重訳においては、起点テキスト (ST) と目標テキスト (TT) 以外、媒介言語での翻訳 (MT) も登場し、多文化・多言語間のコミュニケーションを明らかに観察できると考えられる。前段階で採択した翻訳事例を改めて機械翻訳を使用し、一度英語に訳された後で、当該言語 (ベトナム語及び日本語) に重訳し、訳出の結果を比べる。また、ST と MT を原本として用い、起点言語 (SL) の文化・媒介言語 (ML) の文化・目標言語 (TL) の文化との 3 つ文化の視点を考慮し、TT を作成できた翻訳方略は「三視点对照の翻訳法」と呼ぶことにした。これは重訳の要素を含まれながら、対照する翻訳が成り立つことによって、TT における翻訳のミスを抑制し、適切な翻訳を導く効果があると考えられる。本研究では、主に意味的側面に焦点を置いたため、機械翻訳においても、三視点对照の翻訳法の使用によって訳出の事例をより正確に意味を伝わることを証明する。

2 日目 B 会場 (L702) 9:30 – 10:00

司会 内藤 稔

B-6

司法通訳人の「説明責任」と通訳教育:2016 年米国で結審した 2 つの判決からの考察

田村智子 (国際基督教大学)

Baker & Mainer は 2011 年に “[o]ne major development in the professional world... is the increased emphasis on ‘accountability,’ now a key word in all professions” と述べ、通訳者も他の職業同様「説明責任」を問われる時代になるとし、通訳教育もそれに対応したものにしていく必要があると唱えた。

それを象徴するような判決が昨年米国で 2 つ結審した。1 件は 2015 年 12 月に第 9 管区連邦高等裁判所で判決、翌 2016 年 6 月に連邦最高裁が上告を棄却した *Aifang Ye v. U.S.* で、2 件目は 2016 年 1 月にメリーランド州の最高裁が下級審を覆した *Taylor, III v. State of Maryland* である。いずれも合衆国憲法修正第 6 が規定する「対審権」が、捜査段階において事情聴取に携わった通訳人を証人喚問し被告が反対尋問にかける権利を保障しているかが争われた。

メリーランド州最高裁は、事情聴取時に 2 人の手話通訳人(ASL と CDI)を介して得た聾者 Clarence Taylor の証言を、当該通訳人の法廷での証言無しで証拠採用した下級審判決を覆した。以降同州では手話通訳人及び全ての通訳人が、州管轄の裁判所では証人喚問されることになった。一方、中国語の電話通訳を介した被告人自身の証言に基づき Aifang Ye を有罪とした第 9 管区高裁の判決は、これまで同様連邦最高裁が上告を棄却した。よって 2013 年に逆の判決を下した第 11 管区以外の米国の連邦裁判所では現在も通訳人は未だ「導管」であり続け、被告人は事情聴取時の通訳の正確性を直接問うべきがない。しかしながら上告の際に、申立人側の Amicus Currie (専門家の意見書) が同第 9 管区カリフォルニア州のミドルベリー国際大学院モントレイ校 (MIIS) の Holly Mikkelson や Barry Olsen ら “Interpreting and Translation Professors” から提出された他、マサチューセッツ州法廷通訳人協会も「通訳人は証言台に立ち説明責任を果たすべし」との意見書を提出した。

本発表ではこの 2 つの判決をもとに、可視化が進む 21 世紀における司法通訳人の「説明責任」と通訳教育・訓練の在り方についての考察を行いたい。

#### 【引用文献】

Baker, Mona, and Carol Maier. “Ethics in Interpreter & Translator Training: Critical Perspectives.” *The Interpreter and Translator Trainer* 5.1 (2011): 1-14.



2 日目 B 会場 (L702) 10:10 – 10:40

司会 内藤 稔

## B-7

### 要通訳刑事司法手続きにおける英語の使用及びその再検討の必要性に関する一考察

ヤコブ・E・マルシャレンコ (名古屋外国語大学大学院 (博士候補者))

日本では、通訳を介した刑事裁判において英語は重要な役割を果たしている。裏付ける公式なデータが公表されないものの、司法通訳翻訳人の経験からすれば、そういった英語の役割は刑事裁判に限らず、その前に行われる捜査段階においても見られると推測できる。要通訳刑事裁判で使用率が最も高い中国語と比して、英語の使用率は比較的低い (毎年の使用率は、英語：約 5~8% ; 中国語：約 30%)。とはいえ、英語は毎年刑事裁判で使われる外国語 (通訳言語) の上位 10 言語に入っており、さらには、要通訳裁判員裁判の総件数では、第一位も占めているのである。そういった意味では、日本の要通訳刑事裁判における英語はマイナーな通訳言語とは決して言えない。

しかし、英語の通訳翻訳サービスの対象となる被告人は、多くの場合、この言語の第一話者 (「母語話者」) ではないことが非常に重要である。例えば筆者は、アフリカ (ナイジェリアやウガンダ)、ヨーロッパ諸国 (例えばルーマニア)、やその他の地域 (例えばパラオやインド) の出身者である被告人の裁判で通訳人を務めたことがある。その要因は色々と考えられるが、イボ語、パラオ語、あるいはより稀なヨーロッパの言語を担当できる有能な通訳人を見つけることは、不可能に近く難しいという現状が挙げられる。その結果、裁判所の言語 (日本語) を十分に、ないしは全く解しない被告人ら、そのギャップを埋めるはずの通訳言語 (英語) においても十分な運用能力を有しない恐れがあると指摘できる。すると、それらの被告人らは、法廷ディスコースをどのぐらい理解できるのかという疑問が生じるのではないだろうか。

本発表では、15 名の法廷通訳人への聞き取り調査の結果を紹介しながら、英語の非母語話者が、提供される通訳翻訳サービスにおいて、どのような問題や困難に直面しうるかについて検討する。また、それらの被告人らに、より公正な刑事司法手続きを確保するためには、通訳人及び法曹三者の双方は、通訳翻訳をめぐる課題についてより徹底的に議論をし、「協働責任 (collective responsibility)」(Cooke 2009) の意識を有する必要性について考察する。

2日目 B会場 (L702) 10:50 – 11:20

司会 内藤 稔

## B-8

### 日本の法廷通訳におけるタイ語の一人称と文末詞の使用に関する調査

スッカスイ・ベンチャラット(立教大学大学院博士前期課程)

通訳者は、その方法を通訳規範に左右され、規範に従わないと通訳利用者に指摘されたり、場合によっては仕事を失ったりすることもある。一人称・直接話法の使用はプロ通訳者の規範の一つだとされ(Harris, 1990)、日本を含む世界各地において適切な通訳実践として推奨されている。特に法廷通訳では、事件の判決や量刑に影響を与えるため、被告人の発言を逐語訳で行う必要がある(最高裁判所事務総局刑事局, 2012)。このことから、直接話法の使用が強く求められると考えられる。しかし、タイの法廷通訳は、逐語訳で行うのではなく、内容を要約するなど(Onlaor, 2010)、通常の法廷通訳と異なる通訳の方法を実践し、三人称・間接話法を使用しているという例もある。このことから、タイの裁判は直接話法を使用していないことがうかがえる。その原因の一つは、タイ語の言語的制約だと思われる。タイ語の一人称と文末詞は丁寧さを表す一つの手法だけでなく、話者の性別や聞き手との関係によって変化する。そのため、直接話法の使用という通訳規範に従うのであれば、異性の話者を通訳する時に、自分の性別と異なる一人称と文末詞を使用しなければならない。しかしそうすると、聞き手に違和感を与えたり、通訳者に混乱を招いたりする可能性がある。このことから、タイ語への訳出は直接話法の使用が困難だと推測できる。

本研究は、法廷通訳において日本語—タイ語の通訳者は一人称と文末詞を実際にどのように使用しているかを探ることを目的とした。そして実際の裁判における2人の通訳者の訳出と、模擬裁判における2人の通訳者の訳出をデータとして使用し、テキスト分析を行った。その結果、異性話者を通訳する時と同性話者を通訳する時では文末詞の使用に違いが見られ、異性話者の通訳に何らかの工夫がなされることがうかがえた。また、4人の通訳者に対しインタビュー調査を行った結果、直接話法の使用という通訳規範とタイ語の言語的制約の間に葛藤が見られた。

本発表では、実際の裁判と模擬裁判のテキスト、ならびにインタビュー調査の初期的結果を取り上げ、一人称と文末詞の使用について論じる。また、日本語からタイ語への法廷通訳における直接話法を使用することの困難さについて言及する。

#### 【参考文献】

- 最高裁判所事務総局刑事局(監)(2012).『法廷通訳ハンドブック実践編【タイ語】(改訂版)』法曹会.
- Harris, B. (1990). Norms in interpretation. *Target*, 2(1), 115-119.
- Onlaor, P. (2010). *Saphap-gan-thamngan thatsanakati lae-botbat-khong-lam-nai-san* [Working environment, attitudes and roles of court interpreters]. Unpublished master's project, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand.

2 日目 B 会場 (L702) 11:30 – 12:00

司会 内藤 稔

B-9

対話通訳における通訳行為のなりたちについての考察—新生児訪問模擬通訳の会話分析から—

飯田奈美子(立命館大学客員研究員)

対人援助場面での通訳が介するコミュニケーションは、専門家とクライアントを要通訳者—通訳者のカテゴリーへと移動させる。専門家とクライアントはともに通訳が必要な対象となり、通訳者のコントロールの対象となる。しかし通訳者は専門家とクライアントの関係性を邪魔しない「中立」な立場が求められる。このような事態において通訳者がどのようにふるまい、対人援助の相互行為にどのように影響を与えるかについて考察することは、通訳行為がどのようになりたっているかを捉える上で重要な視点になる。そこで、通訳者の介入行為がどのように秩序化されているかについて、エスノメソドロジーを用いた記述的分析を行う。

研究方法は、新生児訪問場面を再現して通訳ロールプレイを行い、その様子を録音・録画し、相互行為分析・会話分析法にて分析をした。エスノメソドロジーは人々の日常生活において組織化されているある一定の秩序を明らかにするもので、「人々の—方法論 (Garfinkel 1967)」と呼ばれ、社会学で確立された分析方法である。保健師(専門家)と外国人母親(クライアント)の対話がなされる新生児訪問場面は「制度的場面」であり、エスノメソドロジーでは数多くの「制度的場面」研究を行い、相互行為秩序の解明を行ってきた。通訳行為の解明において、このようなエスノメソドロジーの相互行為分析は有効であると考えられる。というのも、通訳者のふるまいは特定の状況に埋め込まれた形で行われるので、通訳者の諸活動がどのように社会的に組織化されるのかについて考察することで、通訳者の介入行為の意義を明らかにすることができるからである。

分析の結果、通訳者は専門家の活動に同調し、クライアントを促す補助職として機能していることが明らかになった。しかし、通訳者は単純に訳出をすることで、そのような機能を実行しているのではなく、さまざまな介入行為や抵抗を表すことでコミュニケーショントラブルを予期し、それらを回避する活動を行っていたのだ。そして、コミュニケーショントラブルを最小化することにおいて、専門職が業務をスムーズに遂行することを支援していることがわかった。通訳者の介入や抵抗は、通訳倫理規程の逸脱行為とみなされるものである。しかし、このような行為がコミュニケーショントラブルを回避させる働きがあることが明らかになったことで、通訳行為を再定義していく議論に貢献することができる。と考える。

【参考文献】

Garfinkel.H. 1967 *Studies in Ethnomethodology*. printice, Hall.

2 日目 B 会場 (L702) 13:30 – 14:00

司会 吉田理加

## B-10

### プロ野球球団通訳者の役割

板谷初子 (北海道武蔵女子短期大学)

本研究の目的は、スポーツ通訳者がどのようなことに留意をして業務を遂行しているのかを明らかにすることである。2017 年の2月から3月にかけて札幌で行われた冬季アジア大会では、有償通訳者が約 250 人、ボランティア通訳者が約 4,000 人動員された。2019 年のラグビーワールドカップ及び 2020 年の東京オリンピックでは、冬季アジア大会を遙かに超える通訳者が必要となることは容易に想像できる。そしてその際には通訳経験の少ないボランティア通訳者の協力が必要になる。そのため、スポーツ通訳業務に特有の留意点を明らかにして広く発信することは、国際スポーツイベントで通訳業務に携わるボランティア通訳者及び有償通訳者に有益であると考ええる。

しかし、日常的にスポーツ通訳に従事する通訳者は多くはない。そのため、本調査では、半世紀以上にわたり通訳者が活躍する日米のプロ野球球団通訳者に焦点をあて調査を行っている。2015 年から 2016 年にかけて、日米球団通訳者 12 人、日本の球団に所属する外国人選手 3 人をはじめとして、球団幹部職員、外国人選手家族、スポーツ記者を対象に半構造化インタビューを行った。また、日本野球機構(NPB.jp)3 球団から協力を得て、練習時にエスノグラフィー観察を行った。取得したデータは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を援用して分析ワークシートを作成し、それによりプロ野球球団通訳者の役割が解明されつつある。

プロスポーツとアマチュアスポーツにおいて、及び、継続的な通訳業務とオリンピックのような一過性のイベントにおける通訳業務においてでは、期待される通訳者の役割に違いは出てくると予想される。しかし、スポーツというフィールドにおける通訳には多くの共通点も見いだされるはずである。本発表では球団通訳者に求められる役割を理解することで、スポーツ選手の通訳をする際の留意点を明らかにすることを目指す。本研究は継続中であり、参加者からのご意見、ご助言を賜ることができれば幸いである。

なお本発表は、平成 28 年度～平成 30 年度科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究(16K13275)「スポーツ通訳者に求められる技術と役割の解明」の成果の一部である。

### 【参考文献】

木下 康仁 (2003). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』 弘文堂

立原智裕(2015). 『球団通訳者に求められる役割に関する研究：日本野球とアメリカ野球における「文化の差」を埋める存在』 修士論文、立教大学異文化コミュニケーション研究科・異文化コミュニケーション専攻

2 日目 B 会場 (L702) 14:10 – 14:40

司会 吉田理加

## B-11

オリンピック・パラリンピックにおけるボランティア通訳の役割—ロンドン、ソチ、リオ大会の実例をもとに—  
西川千春(目白大学非常勤講師)、坂本真実子(ポルト大学言語科学博士後期課程)

2020 年東京オリンピック・パラリンピックにおいては、東京 2020 大会組織委員会が採用する主として大会関係者、アスリート、マスコミ、来場者をクライアントとし大会の運営業務を行う「大会ボランティア」8 万人、東京都が採用する東京に観光も含めて来日する来訪者に対応する「都市ボランティア」1 万人など、多くのボランティアが採用される見込みとなっている。発表ではその中で通訳として活動する通訳ボランティアに焦点を当てる。

オリンピックにおいて、ボランティア通訳を担当する部署は言語サービス部門(Language Services 通称 LANS あるいは LAN)といわれる。他の部署と一緒に同じプロセスで通常大会が開催される 2 年前に募集が開始される。審査、面接を経て約 1 年前に採用が決定する。その後、通訳に関する内容も含めてトレーニングを行い、また「テストイベント」と言われるプレ五輪などのスポーツイベントの場で経験を積んで本番に備えるようにプログラムが組まれている。

言語サービス部門にはロンドン大会では合計 7 万人のボランティアの内およそ 700 人、リオ大会では 5 万人中 1000 人(双方ともオリンピック期間中、パラリンピックを除く)が採用され、主に各競技会場、メインプレスセンター、そして選手村に配属された。主な任務は競技直後の選手に対するミックスゾーンでのビデオ、およびプレスインタビューの逐次通訳である。日本語を含む 20 カ国語以上の言語から、オリンピック公式報道・放送機構である ONS (Olympic News Service)と OBS (Olympic Broadcast Service)の共通語である英語に訳すことが求められる。必然的にボランティアは熟練した英語の非母国語者(ESL)の割合が非常に高い。その他アンチドーピング検査、救急医療事態、報道機関と各国選手団に対する言語サポートを行う。

発表ではロンドン、ソチ、リオ大会でボランティア通訳者として参加した経験を踏まえて、オリンピック・パラリンピックでのボランティア言語サービスの役割とは、ボランティア通訳者とプロ通訳者との役割分担、オリパラにおけるボランティアの考え方とその重要性、どのような人がボランティア通訳者として参加しているか、現場の実態とボランティア通訳の運営における課題について考察する。

### 【参考文献】

- 鶴田 知佳子(2014)「多数国・地域が参加するイベントに向けた大学における通訳教育の試み」  
東京外国語大学論集第 89 号  
西川 千春(2016)「語学を生かしたボランティア(その 1:通訳)」  
オリンピックといえばボランティア(ブログ)

1 日目 C 会場 (L703) 14:00 – 14:30

### C-1 C-2

日本の近世・近代翻訳論研究: 収集からアンソロジー編さんへ

齊藤美野・坪井睦子(順天堂大学)、佐藤美希(札幌大学)、長沼美香子(神戸市外国語大学)、  
北代美和子(翻訳家・東京外国語大学)、南條恵津子(神戸女学院大学)

日本の近世・近代翻訳論研究プロジェクトのメンバー6名は、2014年からの3年間の共同研究の成果をまとめた翻訳論のアンソロジー発行の準備をしている。どのようにして翻訳論を選び、取り上げ、アンソロジーに収録するに至ったか、アンソロジーの内容の解説とともに、執筆者全員で口頭発表する。

本プロジェクトでは、以下の問題設定を行った。日本において歴史的に翻訳は論じられてきたのか、あるいは翻訳者の態度・考えは表されてきたのか、もしそうであればどのように表現されてきたか、また主張の移り変わりはあるか、通底する考えはあるか、現代との繋がりは見いだせるかなどである。これらの問題設定に基づき、プロジェクトのメンバーは3年弱の研究期間にわたり、翻訳者や翻訳に関わる人々の言説や翻訳書そのものなどの文献を幅広く探し、限られた数ではあるものの、できる限り多様な文献を取り上げて講読してきた。その活動から、近世・近代に翻訳について論じられた事柄に関し、翻訳者の態度や翻訳の役割など見えてきたものがある。異文化との交流において、異質さを移入する姿勢、受容者の理解を促す工夫、また起点テキストを尊重する学びなどである。このような点を複数の文献を紹介しながら論じたい。

取り上げる文献は、近世と近代の日本における翻訳に関するものであり、16世紀のキリシタンによる翻訳書とそれに関わる書簡等のパラテキスト、江戸中期の荻生徂徠による論、蘭学時代の始まりにおける杉田玄白らによる翻訳書、明治期のひらがなによる翻訳実践、諸外国との著作権をめぐる交渉の報告書などである。さらに、翻訳論について考察する中で翻訳と関わりの深い通訳(者)に関わる文献にも研究対象を広げたことから、19世紀の蝦夷地におけるアイヌ語通辞の活動を見いだせる「加賀家文書」にも言及する。同資料は別海町郷土資料館(北海道野付郡)から取り寄せたものであり、翻訳通訳学の観点からの研究・考察が有用だと考えられるものである。アンソロジーを切り口として、本プロジェクトの研究活動の内容をあまねく報告したい。

1 日目 C 会場 (L703) 15:20 – 15:50

司会 田辺希久子

C-3

### 150 年間に及ぶ米国憲法日本語訳にみられる翻訳語の変遷

島津美和子(立教大学大学院博士後期課程)

目的言語(TL)の社会に翻訳語が定着する現象は、ある原語がどのように翻訳されるかを通時的に見ることによって把握可能である。一般的に、ある社会に特異な概念が、別の社会に新たに移入されると、初期には複数の訳が存在するが、やがて少数に収斂する(柳父(1982)、古田(2004, 2015)、千葉(2010)、今野(2012))。

一方、英米法の特異な概念の翻訳状況を追跡した研究は管見の限りまだない。古田(2015)が指摘するように、日本の法律用語の大半はドイツ語やフランス語からの翻訳語である。同時に、その後、特に戦後、英米法の影響も受け、英語に由来する用語も存在する。現在日本には大陸法と英米法の2つの法体系が併存しているが、既に大陸法が定着している中で英米法を導入するに際しては、訳語の選定に困難が伴ったことが予想される。

上記を実データに照らし検証するために、本研究では、米国憲法の対訳コーパスを用い、大陸法にはないと考えられる英米法の概念を示す英語の用語 12 語を選定し、それらが最古の日本語訳とされる福沢(1866)から最近の近藤(2015)に至るまでどのように翻訳されてきたか、その変遷を辿る。米国憲法の翻訳を題材に選んだ理由は、期間が 150 年と長く、数としても約 90 の日本語訳が存在し、個々の翻訳者の影響が薄れ、より客観的な結果が得られると推定されるためである。

データを分析した結果、以下の2点が判明した。第一に、筆者が収集したコーパス中、最古の2件、福沢(1866)と林(1873)は、訳出が残りの翻訳者と懸け離れていた。福沢(1866)は、異質な概念の場合、訳出しない翻訳方略を選択する場合もあった。一方、林(1873)は、片仮名書きの音訳を用い、註を挟むという戦略を採った。第二に、残りの翻訳者については、何らかの翻訳語を用いており、その翻訳語は、一つに収斂したものもあれば、現在も複数存在しているもの、あるいは従来は漢語で翻訳されてきたが、近年、片仮名語が優勢になったものがあり、類型化が可能であることがわかった。

翻訳語の変遷を知ることが、各原語の理解を深める上で有益である。言語は生きている以上、今後これらの訳語が変化していくことも十分考えられる。引き続き、動向を追う必要がある。

本研究の限界は、これらの翻訳語の非翻訳文書の出現率を考慮していない点である。この点は今後の研究課題である。

#### [参考文献]

- 千葉謙悟 (2010) 『中国語における東西言語文化交流』 三省堂
- 古田裕清 (2004) 『翻訳語としての日本の法律用語』 中央大学出版部
- 古田裕清 (2010) 『源流からたどる翻訳法令用語の来歴』 中央大学出版部
- 今野真二 (2012) 『百年前の日本語』 岩波書店
- 柳父章 (1982) 『翻訳語成立事情』 岩波書店

1 日目 C 会場 (L703) 16:10 – 16:40

司会 田辺希久子

C-4

Negotiating Spaces for Translated Literature: Reflections on Compiling Anthologies/Series of Contemporary Japanese Literature in English Translation

David Karashima (Waseda University)

Over the past several years I have been involved in the compilation of a number of anthologies and series of contemporary Japanese literature in English translation (in most cases in collaboration with various co-editors). Three of these initiatives have been theme-based anthologies comprising short works of fiction/non-fiction by a range of authors and the two others have been series made up of medium-length works of contemporary Japanese writers. While all five center around the publication of contemporary Japanese literature in the English translation, each project is distinct, needless to say in terms of content, but also in the way they have been framed for English-speaking audiences. The charity anthology *March Was Made of Yarn: Reflections on the Japanese Earthquake, Tsunami, and Nuclear Meltdown* was published simultaneously in the US, UK and Japan in 2012, one year after the triple disasters that struck Northeast Japan in March 2011; the spring 2014 issue of the UK literary magazine *Granta*, the first in the magazine's long history to focus on Japan, was also published both in English and Japanese, and featured many works by up-and-coming Japanese authors, presented side-by-side with works by writers originally writing about Japan in English; and the March 2015 issue of the on-line literary magazine *Words Without Borders*, focusing on translations of Japanese literature, and compiled around the theme of "Memory," was later partially incorporated into the WWB campus, an education initiative that connects educators and students to international literature via a virtual learning space. The two series were both published in the UK (though the editorial team spanned three continents): the *Keshiki Series* was an interesting case of local collaboration in which Strangers Press (at the University of East Anglia) and the Norwich University of the Arts combined forces to produce a set of individually designed chapbooks showcasing the work of eight Japanese writers; and Pushkin Press's Contemporary Japanese Novella Series, which will have published six different authors by the spring of 2018, was unique in its focus on the novella—a particular vibrant and popular form in Japan. This presentation will reflect on the abovementioned initiatives (as well as other recent innovative initiatives in translation publication) to present the variety of ways in which literature in translation is being published within in the contemporary literary scene.



1 日目 C 会場 (L703) 16:50 – 17:20

司会 田辺希久子

C-5

Value Appraising and Translator Style: An analysis of Swedish to Japanese translations of the crime novel *Roseanna* using Appraisal Theory

Michael Bengtsson (Rikkyo University M)

The study of translator style within translation studies has traditionally been thought of as an area not particularly amenable to research. Either style is considered to be too elusive and interpretive to be able to analyze properly, or style has been defined as something inherently essential within literature and as such has not been perceived as a worthy object of study (Boase-Beier, 2006). While research into translator style has been conducted in the past, mainly through corpus analysis (e.g., Malmkjaer, 2003; Baker, 2000; Saldanha, 2011a, b, c), no coherent or consistent framework has been developed for this purpose. In 2012, Jeremy Munday adopted the linguistic framework of Appraisal Theory into translation studies for the purpose of analyzing translator style through evaluative language such as the translation of evaluative epithets, graduation of lexis and discursive engagement.

This paper uses Appraisal Theory to analyze translator style in two translations, one published in 1975 and the other in 2015, of the Swedish crime novel *Roseanna*, mainly focusing on the translation of evaluative epithets and graduation. Corpus analysis is conducted using the corpus creation and querying tool SketchEngine and the corpus annotation tool UAM. Statistics generated by these two software applications are used to illustrate the distribution of the epithets and graduation within the text. The results gathered from the analysis will then be situated within a larger context, attempting to explore why these choices were made by looking at translator fore- and afterword to see if the first translation exerted any influence on the later translation.

Initial findings indicate that strong differences exist between the two translations, not only in terms of how the epithets are translated but also in terms of class shifts, omissions and meaning shifts. Future work would consist of expanding the data analyzed to include more novels of the same author in an attempt to establish what could be considered to be a distinctive translator style.

2 日目 C 会場 (L703) 9:30 – 10:00

司会 坪井睦子

## C-6

ナカタさん(『海辺のカフカ』)の変わった話し方は英語でどのように翻訳されるのか

山木戸浩子(藤女子大学)

村上春樹の『海辺のカフカ』に登場する偶数章の主人公ナカタさん(初老の男性、読字障がい者)は、他の登場人物や読者に話し方が風変わりである印象を与える。本発表では、その印象が四つの特徴に起因することを示し、さらに英語翻訳版(Philip Gabriel 訳)におけるそれぞれの特徴への対応を考察する。

ナカタさんの話し方は、(i)「であります」の使用、(ii) 自称詞「ナカタ」の使用、(iii)「～さん」の使用、(iv) カタカナ表記の使用、の四つの特徴を持つ。例[1]にはこれらが全て見られる。

[1] 「行方のわからなくなった猫さん<sup>(iii)</sup>を探すのであります<sup>(i)</sup>。このようにナカタ<sup>(ii)</sup>は猫さん<sup>(iii)</sup>と少し話ができますので、あちこちまわってジョウホウ<sup>(iv)</sup>をあつめまして、[…]

(p. 99)

(i)と(ii)は一般的に軍隊のイメージと結びつき(衣畑・楊, 2007)、(iii)は幼児のイメージから柔らかさが加わり(岡崎・南, 2011)、全体として彼の話し言葉に風変わりな印象を作り出している。(iv)は その語の意味が理解されていないことを読者に向けて視覚的に表している。

一方、英語翻訳版では(ii)と(iv)にのみ直接的な対応が見られた。まず(ii)について、例[2]に示すように「ナカタ(は)」は *Nakata* と訳されている。(但し、一文目には主語の「私」が含まれていないものの、英語では主語を省略できないため *I* が加えられている。)

[2] 「ここにちょっと腰をおろしてもかまいませんか? ナカタはいささか歩き疲れましたので」

(p. 93) “Do you mind if I sit down here for a while? *Nakata*’s a little tired from walking.”

定期的な *Nakata* の使用は、彼の英語の話し言葉に風変わりな印象を保つのに重要な役割を果たしている。

(iv)について、英語では綴りと発音が必ずしも一対一の関係にないことを利用し、例えば「キンユウロン」*theory of finance* は内容語 *theory* と *finance* が修正の対象となり、*theory* には誤った綴り *theery* を与え、*finance* は *fine ants* に置き換えている(マラプロピズム)。

以上、(ii)と(iv)への対応から、英語版の読者もナカタさんの言語能力・運用が一般的な大人と異なることに気づかされるのである。

### 【参考文献】

衣畑智秀・楊昌洙 (2007) 「役割語としての「軍隊語」の成立」金水敏(編)『役割語研究の地平』, 179-192, くろしお出版。

村上春樹 (2002) 『海辺のカフカ<上>』『海辺のカフカ<下>』(新潮文庫) 新潮社。

Murakami, Haruki (2005) *Kafka on the Shore*. J. Philip Gabriel (trans.). New York: Knopf.

岡崎友子・南侑里 (2011) 「役割語としての「幼児語」とその周辺」金水敏(編)『役割語研究の展開』, 195-212, くろしお出版。

2 日目 C 会場 (L703) 10:10 – 10:40

司会 坪井睦子

### C-7

#### 『不思議の国のアリス』再翻訳テキストによる日本英文学翻訳史の検討

行田英弘(無所属)

Gideon Toury によって提唱された「翻訳規範」(Translational Norm)は、記述的翻訳研究(Descriptive Translation Studies)の理論的支柱として数多くの研究に援用されてきた。佐藤(2008)もそのような研究の一つであり、ここで佐藤は日本の英文学翻訳の通時的展開を、支配的な規範とそれに挑戦する新たな規範とが織りなす「交渉」から描き出している。

この佐藤の研究は、明治から現代に至るまでの長いスパンの日本の英文学翻訳について、一人の研究者が統一の方法を持って記述しているという点で、類例がなく貴重である。しかし、佐藤自身も認めている通り、この研究の資料は翻訳に関わる規範意識を示す種々の「言説」に限られており、実際の翻訳テキストに対する言及はない(ibid.: 19)。言い換えると、佐藤(2008)によって規範「意識」の変遷は明らかになったものの、実際の翻訳作品が(どの程度)規範通りに変化していったのかについては未検証のままであった。

したがって本発表は、実際のテキストに起こった推移(shifts)に着目し、佐藤(2008)の記述する規範意識の変遷がどの程度それらを説明するのかを検証する。その際、同時に翻訳規範という道具立てそのものについても、その予測能力の精緻化を試みる。具体的には、明治から連綿と翻訳され続けてきた Lewis Carroll による英児童文学の金字塔『不思議の国のアリス』(Alice's Adventures in Wonderland, 1865)の、明治～昭和期に出版された 16 の翻訳(初訳と 15 の再翻訳)をデータとして用い、テキスト上の「ことば」に密着する翻訳文体論(Translational Stylistics)の立場から(特に Munday(2008)のモデルに従って言語事象を分類し)、主に計量的な方法でテキストの推移を跡づけ、それを佐藤(2008)の記述と対照させる。本発表はそこから、(1)佐藤の規範意識変遷の記述が実際のテキストの変遷に対して有する説明力は限定であり、(2)翻訳規範は「説明」能力は高いが、概して「予測」能力は低い、と主張する。

なお、本発表は2016年度に北海道大学大学院文学研究科に提出された同名の修士論文に基づくものである。

#### 【参考文献】

佐藤美希(2008)「英文学翻訳の翻訳規範に関する一考察—『英語青年』誌に見られる英文学研究及び社会潮流との関係から」(北海道大学博士論文)

Munday, Jeremy (2008) *Style and Ideology in Translation: Latin American Writing in English*, London and New York: Routledge.

2日目 C会場 (L703) 10:50 – 11:20

司会 坪井睦子

### C-8

女性向けの翻訳・非翻訳テキストの文体比較: 定量分析とアンケートによる受容研究を通して

古川弘子(東北学院大学)

本研究の目的は 2 つある。第一に、現代女性向けの小説の翻訳テキストと非翻訳テキスト(日本語で書かれたテキスト)の文体の比較研究をすることである。次に、その文体に対して実際の読者がどう感じるのかを受容研究を通して探ることだ。この研究を行う理由は、翻訳テキストに出てくる女性が最も女らしい話し方をしていると指摘されているが(中村, 2012, pp. 9-11)、実際に翻訳テキストと非翻訳テキストに出てくる女性の話し方を比較した研究はほとんどなく、それぞれの話し方についての読者受容研究も活発に行われているとは言い難いからだ。

文体的特徴とは一般に言語的特徴のことを指すが(Wales, 2011, p. 398)、中でも今回は文末詞に焦点を当てた定量的分析を行う。文末詞は日本語の女ことばの代表的な用法とされており、文末詞の使用には顕著な性差がみられるのがその理由である(益岡・田窪, 2014, p. 52, pp. 222-224)。

使用する小説は『あまからカルテット』(柚木麻子著, 2011)と『ハリー・ウィンストンを探して』(Lauren Weisberger 著, 佐竹史子訳, 2009)である。共に 30 歳前後の女性の恋愛や仕事をテーマとしており、複数の女性の会話を中心に物語が進むため、今回の分析に適していると考えられる。定量分析により会話文の文末詞使用を数値化し、文体的特徴を探りたい。

文体比較の後、それぞれの文体の読者受容を調べる。発表者は先に、ある翻訳者ができるべく女ことばを使わないで訳すという試みを行ったものの、編集過程で女ことばを加えられて出版されたテキストの事例研究を行った(Furukawa, forthcoming)。この背景には、「読者の持つ翻訳テキストに対する期待」に合わせようとする意思が働いたと推測される。しかし、本当に読者が翻訳テキストに対してある種の期待を持っているのかは疑問が残る。出版する側が考える「読者が持っている期待」と、実際の「読者が持っている期待」が合致していない可能性もあるからだ。そこで、実際の読者は翻訳・非翻訳テキストにどのような文体的特徴を見るのか、またその特徴をどう受け止めたかについてアンケートを通して探っていく。

#### 【参考文献】

中村桃子(2012)『女ことばと日本語』岩波書店

益岡隆志・田窪行則(2014)『基礎日本語文法一改訂版一』くろしお出版

Furukawa, H. (forthcoming) A De-feminized Woman in Conan Doyle's *The Yellow Face*. In J. Boase-Beier, L. Fisher & H. Furukawa (Eds.), *The Palgrave Handbook of Literary Translation*. New York: Palgrave Macmillan.

Wales, K. (2011). *A Dictionary of Stylistics* (Third edition). Edinburgh: Pearson Education Limited.

2 日目 C 会場 (L703) 11:30 – 12:00

司会 坪井睦子

### C-9

#### 歌詞翻訳における翻訳ストラテジーの考察—ディズニー映画の挿入歌の分析から—

野田和花(東京外国語大学大学院総合国際学研究所修士課程)

歌詞の翻訳において原文と訳文には一見すると大きな隔たりがある。これは、ディズニー映画「アラジン」の挿入歌「A Whole New World」からの一節“A whole new world”が日本語版で「大空」と訳されていることからわかる。これは歌詞翻訳には既存の翻訳のカテゴリーとは違った特徴的な制約があることが原因だと考えた。そしてそのような制約を乗り越えるためのストラテジーにも何らかの傾向があり、それを分類することで歌詞翻訳の特徴が発見されうると考えた。

素材として扱ったのはディズニーのミュージカルアニメーション映画の挿入歌である。登場人物のセリフとしての役割を持ち、登場人物の性格を特徴づけ、ストーリー展開に影響を与えるミュージカル映画の挿入歌は、コンテキストが必ずしも重要ではない大衆音楽等とは異なり歌詞の意味が重視されるため、学術研究の分析対象として適していると考えた。

研究方法としては、まず歌詞翻訳における主要な制約（①文字数（音節数）の制限、②訳文のわかりやすさ、③言葉の響き）を特定した。この3つを歌詞翻訳の基本的制約と仮定し、これらに対するストラテジーに着目して分類を行った。分類は翻訳ストラテジー論の手法を参考にしたが、翻訳ストラテジー論において行われる統語的分析は歌詞翻訳のような自由度の高い訳においては採用不可能であったため、本研究では翻訳ストラテジーから生じる効果に注目し、語用論的視点も取り入れることで分類に成功した。

分析の結果、①意味の圧縮、②意味の抽出、③一部維持、④言いさし表現、⑤コンテキスト（映像）関連の明示化・暗示化の5つのストラテジーを発見した。

また、歌詞翻訳の特徴としては、映像と訳が一致していること、耳で聞いて意味が理解できるようなわかりやすい訳であること、文字数（音節数）が合うことが重要であり、原文の文字通りの内容以上に原文のメタメッセージが重視されるとの示唆を得た。歌詞翻訳は、映像・音楽・言葉の要素のバランスが重要となることが明らかになり、なぜ歌詞翻訳では原文の文字通りの意味と一致しない柔軟な訳が多いのかという問いに対する答えを導き出すことができた。

本発表では、今まで研究されてこなかったミュージカル曲の歌詞翻訳の特徴に加え、テキスト分析だけでなく非言語要素に注目することの重要性について考察したい。

2 日目 C 会場 (L703) 13:30 – 14:00

司会 佐藤美希

#### C-10

日本における韓国絵本翻訳—『とらはらパーティー』と『天女銭湯』の方言翻訳を中心に—

尹 惠貞(一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程)

韓国では、1988年に初めての絵本『ペクトゥサンイヤギ』が出版された。同書は、その2年後に、日本でも『山になった巨人—白頭山ものがたり』(1990、福音館書店)として翻訳され、出版されている。その後、欧米圏の絵本と比較すると数が多いとは言えないものの、韓国の絵本は着実に日本で翻訳出版されることとなっている。

本報告では、そのような絵本のうち、2000年代に入り翻訳出版された『とらはらパーティー』(2011、岩崎書店。以下『とらはら』とする)、そして『天女銭湯』(2016、ブロンズ新社。以下『天女』とする)を取り上げることとした。

これらの書物を対象としたのは、いずれも方言翻訳に関わるものであるためである。具体的には、『とらはら』の方では原文テキスト(Source Text, 起点テキスト、以下ST)に方言が使われ、『天女』の方では翻訳テキスト(Target Text, 目標テキスト、以下TT)が方言として訳出されている。絵本で方言翻訳がどのように現れているかを、絵本の特徴である絵と言葉の相互依存関係から分析する、ということが、本研究の目的である。

このような目的から、まず絵本の定義<sup>1</sup>、翻訳の定義<sup>2</sup>、及び役割語の定義<sup>3</sup>を行うことが必須となる。何故ならば、STで方言として出現しているものをTTに翻訳する際、TTの方言に翻訳してもSTの地域性は捨象されてしまう。それを補うために役割語の翻訳がなされているが、役割語の翻訳をするためには、絵をどのように読むかということが重要になる。また、翻訳がテキストの翻訳(置き換え)に留まらず、文化翻訳としての意味を併せ持つということも、これらの定義を行うことが必須になる理由である。

なお、絵を読むということについては、ジェーン・ドゥーナンの『絵本の絵を読む』(玉川大学出版)によりつつ、絵本の特徴的な絵を読むことを意味する。その際、まずはそれぞれの絵本の内容を紹介した上で、絵本の特徴的な絵を読んだのち、テキストの文体・呼称・方言に焦点を当てることとした。方言翻訳と言いながら、文体・呼称にまで焦点を当てるのは、方言を話体と考えると、絵本のテキストの地文は文体と考えられ、呼称はまさに方言で誰かを呼び、呼ばれる時に使われるからである。

<sup>1</sup> バーバラ・ベイダー (1976) 『*American Picturebooks: from Noah's Ark to the Beast Within*』 Macmillan Publishing

<sup>2</sup> ローマン・ヤーコブソン (1973) 『一般言語学』 川本茂雄他訳 みすず書房

<sup>3</sup> 金水敏 (2007) 『役割語研究の地平』 くろしお出版

2 日目 C 会場 (L703) 14:10 – 14:40

司会 佐藤美希

### C-11

**通訳・翻訳技能とテクノロジーが可能にした新しい翻訳実践:ポール・マッカートニーのコンサートを例に  
松井祐実(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士前期課程修了)**

一般的に「通訳」は口頭・手話言語から口頭・手話言語への訳出を指すとされ、「翻訳」は書記言語から書記言語への訳出を指すとされる。しかし、実際に現場で行われている翻訳実践には、書記言語を口頭言語に訳出するサイト・トランスレーションや口頭言語を書記言語に訳出する字幕翻訳など、「通訳」か「翻訳」か単純に区別できない翻訳実践や翻訳現象が存在する。本研究では、そのような翻訳実践の一つとして、ポール・マッカートニーのコンサートで用いられている翻訳実践を調査した。日本で行われるポール・マッカートニーのコンサートでは、マッカートニーの発話がほぼ同時に日本語字幕となり、会場スクリーンに映し出される。つまり、口頭言語から書記言語への訳出が同時通訳のような速度で提供されている。本研究では、この翻訳実践を「リアルタイム字幕翻訳」と呼び、この実践の仕組みや内容、行われるに至った背景、関わる人々、また実践を可能にする技術など、さまざまな角度から検証した。「リアルタイム字幕翻訳」は発表者が調べる限り翻訳研究では取り扱われていない。本研究では、文献調査、実践観察、およびコンサートの翻訳実践に関わった人への半構造化インタビューを通じて、分析・考察した。

調査の結果、日本で行われるポール・マッカートニーのコンサートで用いられる翻訳実践は、マッカートニーが英語で発言した後、別会場にいる通訳者が同時通訳し、字幕速記者がその訳出物を聞き取り特殊なキーボードを用いてタイプして字幕を作り、会場スクリーンに伝送しているということが分かった。このリアルタイム字幕翻訳は、人間の通訳・翻訳技能を用い、さらにテクノロジーを活用した、同時通訳と字幕翻訳の入り混じった極めて新しい翻訳実践と言えるだろう。

本発表では、上記調査結果も含め、本研究で明らかになったことを報告する。そして、今後ますますこういった翻訳実践に活用されるであろうテクノロジーの可能性についても言及したい。

1 日目 D 会場 (L704) 14:00 – 14:30

司会 武田珂代子

D-1

Building evidence on the impact of translation segments to quality – A preliminary study

Yumiko Kinoshita-Motomura (Visiting Researcher, Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo)

This study aims at building evidence regarding the impact of the length of translation segments to output quality. By defining the length of segments as the number of sentences, a text was chosen and divided into four parts. (The text was on the discovery of Vitamin B, which was retrieved from Aozora Bunko.) The first part was translated segment by segment where the translator was allowed to look at one segment at a time and not to look at the other segments to obtain information from neighboring segments. The second to fourth parts were translated by two sentences, three sentences, and four sentences, respectively, at a time by following the same procedures. The extraction of the segments was done by a python program, in which the translation itself was performed on Microsoft Word. The translated outputs in each part were then evaluated by human-rated scores (according to TAUS Dynamic Quality Framework) using error categories and severity scores. The outputs were evaluated also by using automated readability scores. The result suggests that translation outputs improved in quality as the length of segments became longer. Furthermore, a reasonable level of quality was achieved if three segments or more were translated together. In particular, “Link/cross reference” errors occurred most and “over-translation” and “grammar” errors were seen next in frequency and severity when the given segments were short. The errors and severity in these error categories reduced as the segments became longer. The automatic readability scores also show that the readability improved as a general trend when the segments for translation were sufficiently long.

The use of the information that we could obtain from neighboring segments is important to improve overall quality. One of the implications of this research is the use of Computer-assisted Translation (CAT) tool and/or machine translation by translators to produce outputs because both systems employ sentence-by-sentence input and output mechanism. It could be beneficial for the research community (as well as the author) to hear from the audience and discuss together at the coming conference an effective method to build evidence of the impact of the length of segments to give to quality.



1 日目 D 会場 (L704) 14:40 – 15:10

司会 武田珂代子

D-2

Development of a balanced quality assessment framework for Japanese to Simplified Chinese translation of CSR reports

Beibei He (Rikkyo University D)

Most existing error annotation schemes – e.g., SAE J2450<sup>4</sup>, TAUS DQF-MQM<sup>5</sup>, American Translators Association (ATA)<sup>6</sup>, Multidimensional Quality Metrics<sup>7</sup> and other MT-focused schemes – overlook deficiencies in the source text (ST) which may induce errors in the target text (TT). While experienced translators have developed ways of coping with such issues, novice translators tend to stick to the ST. In Japan both language service providers (LSPs) and clients now realize that not only errors but also specific linguistic features in Japanese STs induce translation quality issues. However, a lack of understanding of the impact of problematic ST on translation quality and of a systematized methodology for managing source issues on both the client and LSP sides results in translations deemed unacceptable, often with repeated revision cycles which increase time and cost. Motivated by the urgent need for a balanced error scheme, this paper develops and tests a typology that covers errors originating from both ST and TT. Combining elements of the TAUS and ATA schemes, it is tested on Japanese (JA) to Simplified Chinese (ZH-CN) translations of Corporate Social Responsibility (CSR) reports, a domain in which the researcher's considerable personal experience as translator and language analyst has allowed her to observe the 'error cycle' noted above. Moreover, CSR reports are interestingly different from the technical documents targeted by the industrial error schemes cited above in so far as they have, in addition to technical content, a marketing function. Since a CSR report is usually localized using TM tools, the TAUS error typology is useful for its emphasis on errors related to localization aspects; it is complemented by ATA's focus on textual analysis, which fits the marketing aspect of CSR reports.

To validate this combined scheme, we took ten extracts from CSR reports in JA published by ten companies that won the 20th Environmental Communication Awards hosted by the Ministry of the Environment and their ZH-CN translations, available on-line. Iterative quality assessment was performed by two assessors to tailor the scheme for JA to ZH-CN translation, inter-assessor agreement being measured by Cohen's kappa coefficient.

---

<sup>4</sup> [http://standards.sae.org/j2450\\_200508/](http://standards.sae.org/j2450_200508/)

<sup>5</sup> <https://www.taus.net/evaluate/qt21-project#harmonized-error-typology>

<sup>6</sup> [https://www.atanet.org/certification/aboutexams\\_error.php](https://www.atanet.org/certification/aboutexams_error.php)

<sup>7</sup> <http://www.qt21.eu/launchpad/content/multidimensional-quality-metrics>

1 日目 D 会場 (L704) 15:20 – 15:50

司会 武田珂代子

D-3

「原文の歪曲」の謎: MNH-TT の校閲カテゴリ「X3」から見る学習者の訳出プロセスと学習効果

山田 優 (関西大学)、大西菜奈美 (関西大学 M)、藤田 篤 (情報通信研究機構)、

影浦 峯 (東京大学)

本研究では、翻訳学習者向け共同翻訳プラットフォーム『みんなの翻訳実習』(以下 MNH-TT)の校閲カテゴリを使用して、特定の翻訳エラーが発生するに至った経緯を明らかにし、その原因の詳細を分析することで、翻訳学習のさらなる効率化を目指す。

社会構成主義的アプローチに基づく協同学習 (Kiraly, 2000) とそれによる効果は翻訳学習においてすでに高く評価されており、この枠組を援用する MNH-TT もまた、翻訳プロジェクト機能を用いて、学習者が実務翻訳のワークフローや構成要素を理解しながら、「翻訳力」及び「翻訳者力」を高めるためのツールとして使用されることを目指している(影浦 et al., 2016)。このうち校閲カテゴリは、学習指導者等が学習者の訳出物を修正・添削する際に用いることにより、誤りの全体像に関するメタ学習を促進する機能である。校閲カテゴリ体系は決定木の形式で整理されており、複数の添削者が添削を行った場合でも、カテゴリを比較的一貫して付与できる(豊島 et al., 2016)。また、付与された校閲カテゴリは、翻訳者(学習者)に対する一貫性のあるフィードバックも可能にし、大きな学習効果を生むことも検証されている(山本 et al., 2016)。しかしながら、校閲対象となる翻訳上の課題全てが一定の学習期間の間に同じように減少するわけではなく、中には、あまり学習効果がみられないエラーの種類も存在する。初学者の翻訳に最も多く付与される[X3 原文の歪曲]のカテゴリがこれに該当する (ibid.)。このエラーは、読者に原文を誤解させかねないような訳をした場合に付与されるカテゴリであるが、これが発生する主原因はまだ突き止められていない。

本研究では、学習者の訳出物において X3 が付与された箇所を対象として、翻訳者になぜそのような訳出(エラー)を生じたのかの原因を探る。具体的には、翻訳プロセスの追試実験を通して収集した訳出過程の記録(Translog-II)と、校閲カテゴリを付与した訳出物を見ながらの回顧インタビューのデータを併用して、学習者の訳出プロセスを記述することにより、エラー発生の心的原因に迫る。本発表でその暫定結果を示し、今後、学習者に起こる翻訳エラーを効果的に減らすための方法論の一例を提案する。

#### 【参考文献】

Kiraly, D. (2000). *A Social Constructivist Approach to Translator Education: Empowerment from Theory to Practice*. London/New York: Routledge.

影浦峯, Harley, A. Thomas, M., 内山将夫. (2016)「みんなの翻訳実習における『足場』と翻訳力・翻訳者力～みんなの翻訳第6報～」『言語処理学会 第22回年次大会 発表論文集』 857-860.

豊島知恵, 藤田篤, 田辺希久子, 影浦峯, Hartley, A. (2016)「校閲カテゴリ体系に基づく翻訳学習者の誤り傾向の分析」『通訳翻訳研究への招待』16, 47-65.

山本真佑花, 田辺希久子, 藤田篤. (2016)「翻訳学習者の学習過程におけるエラーの傾向変化」『言語処理学会 第22回年次大会 発表論文集』 865-868.

1 日目 D 会場 (L704) 16:10 – 17:20

#### D-4 D-5 ポスター発表

##### 産業翻訳における「機械翻訳有効案件」の成立条件と翻訳工程

河野弘毅 (ポストエディット東京)

この研究の目的は「産業翻訳において、どのような案件を選びどのような工程で機械翻訳の前後処理を行えば、機械翻訳を下訳に使うと時間短縮とコスト削減を実現できるか？」という問いに答えることである。

2016 年 11 月のグーグルニューラル機械翻訳の登場によって産業翻訳の現場でも機械翻訳を下訳として活用する期待がかつてなく高まっている。しかし実際に機械翻訳の出力を人間と同等の品質になるまでポストエディットすると、予想以上に時間がかかってコスト削減に結びつかないケースが多い。多くの産業翻訳従事者の間で、機械翻訳を下訳に利用して時間短縮とコスト削減を実現できるかもしれないという直感がひろく共有される一方で、すべての案件において時間短縮とコスト削減を実現できるわけではないという経験もまたひろく共有されてきた。

この直感と経験をふまえたうえで産業翻訳における機械翻訳の活用方法を探求するには、機械翻訳を下訳として活用できる産業翻訳案件は一定の条件を満たしているという仮説を措き、その条件を満たす案件（「機械翻訳有効案件」）を見極めて機械翻訳を適用するとともに、機械翻訳の前後処理工程を慎重に設計・運用する必要があると考える。

この発表の前半では、産業翻訳の実務案件にできるだけ近いモデル文書をケーススタディに用いて「機械翻訳有効案件」とそうでない案件を判別する判定基準を提案する。この判定基準は翻訳対象テキストの分野と種類および顧客属性などの複合要因から構成される。翻訳の言語方向は英日および日英に限定する。この発表の後半では、前半で提示した機械翻訳有効案件に対してどのような翻訳工程を採用すれば時間短縮とコスト削減を実現できるのか検討して提案する。なお、機械翻訳出力のポストエディットに関する要件を規定した国際規格 ISO 18587 が 2017 年 4 月に発行されたが、この規格とこの発表で提案するポストエディット工程がどのように整合するか（あるいはしないか）についても言及する。

#### 【参考文献】

ISO 18587:2017 Translation services -- Post-editing of machine translation output -- Requirements

1 日目 D 会場 (L704) 16:10 – 17:20

#### D-4 D-5 ポスター発表

##### 同時通訳における語の欠落に関する定量的分析

蔡 仲熙(名古屋大学大学院研究生)、笠浩一郎(三重短期大学)、松原茂樹(名古屋大学)

同時通訳は、原発話を聴取すると同時に、その内容を理解し、目標言語に変換して聴者に伝達する高度な言語行為である。通訳者が同時通訳を遂行する上で、訳出に困難をもたらす様々な場面が様々に発生する。このような場面を自動的に検出することができれば、その部分に限定して発話の内容や訳語の候補を提示することも可能となるため、通訳者の処理能力及び記憶にかかる負担を軽減させる支援環境の実現が期待できる。

同時通訳において訳出が困難な場面は、訳の品質の低下を伴うことが多く、そのような低下の一現象として、語の欠落、すなわち、訳されるべき語が訳されないという現象が生じやすい。このため、訳出困難な箇所を特定するための手がかりとして、対訳文において欠落した語に注目することが考えられる。語の欠落が生じる場面に特化して生じる原発話の特徴、あるいは、通訳者の状況などを取り出すことができれば、それらを上述の場面の検出に活用できる。同時通訳における語の欠落については、これまで様々な研究において検討され、すでにいくつかの特徴が示されている。しかし、そのような特徴の程度と欠落の起こりやすさとの関係は明らかではない。

そこで本研究では、「原発話の特徴あるいは通訳の状況」と「語の欠落の発生割合」との関係を定量的に分析した。分析には、同時通訳データベースに収録されている講演データのうち、英日同時通訳の 88 講演を用いた。使用したデータには、200msec.の無音区間で分割された発話単位レベルの対訳対応関係、及び、内容語(名詞、動詞、形容詞、副詞など)レベルの対訳関係が付与されている。本データでは、対訳語がない内容語も明示されているため、語の欠落に関する分析対象の選定に使用することができる。

分析では、原発話の特徴として、講演者の話速や内容語の品詞などを対象とした。また、通訳の状況として、通訳者の訳出遅延の程度などを対象とした。本発表では、上記の分析の結果及び考察について論じる。

1 日目 D 会場 (L704) 16:10 – 17:20

#### D-4 D-5 ポスター発表

##### 連用節への換言を介した連体節英訳手法の開発

佐良木 昌 (明治大学)、原田康也 (早稲田大学)、森下美和 (神戸学院大学)

英語においては、非制限用法の関係代名詞節には、原因や理由の副詞節的機能があり、制限用法の関係代名詞節には、条件的な関係を表す事例があると指摘されている (Quirk et al., 1985)。さらに、関係代名詞節と従属節との換言事例が示され、制限関係代名詞節を条件の従属接続詞節に、また非制限関係代名詞節を理由の従属接続詞節に換言可能と指摘している。Quirk らから、制限関係代名詞節の換言例を引く (強調と和訳は引用者による)。

Students **who** work hard pass their exams. 一生懸命に勉強する学生は、試験に通る。

**If** students work hard, they pass their exams. 一生懸命に勉強すれば、学生は試験に通る。

こうした換言方式が可能ならば、英日翻訳では、<関係代名詞節の翻訳手法として、連体節に和訳する手法に加えて、連用節に和訳する手法>が考えられる。また、英語従属接続詞節を連体節へ和訳する手法がすでに考案されており (高橋、1982; 別宮、1983)、<英語従属接続詞節の翻訳手法として、連用節への和訳と連体節への和訳する手法>との二つが揃う。

和文においては、連用節と主節とからなる文では、連用節述部と主節述部との関係が事柄間関係を示し、その関係性は連用節末の接続表現が表している。他方、主節主名詞を飾る連体節と主節とからなる文では、両節の関係性は明示的ではないが、「日本語の非限定的連体節表現には、述定の装定の表現が幅広く観察される。事態間関係を非限定的連体節の表現で表す場合もその例」との指摘がある (益岡、1997)。これを踏まえると、「対比・逆接」「継起」「原因・理由」「付帯状況」を表す連体節は連用節に換言できるとの知見を導出できる。この知見と、上述の英語換言方式とから、連体節を英語従属節や分詞構文に翻訳する手法を開発できる。

この連体節の連用節への換言には二形態があり (佐良木, in press)、接続詞などを用いて連用節に換言できるとき英訳は従属接続詞節が適切であり、シテ形接続に換言できるときには分詞構文や with 構文が適切である。この二方式の換言と翻訳とが、英訳の基本方向として考えられる。本発表では、連体節の英訳手法の開発を中心に報告する。

#### 【参考文献】

- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1985). *A comprehensive grammar of the English language* (pp. 1241-1242). London: Longman.
- 高橋泰邦 (1982)『日本語をみがかく翻訳術—翻訳上達の 48 章』145. バベルプレス
- 別宮貞徳 (1983)『誤訳辞典』99. バベルプレス
- 益岡隆志 (1997)『複文』167-180. くろしお出版
- 佐良木昌 (in press)『時枝古典解釈文法から翻訳過程論への示唆』明石書店

1 日目 D 会場 (L704) 16:10 – 17:20

#### D-4 D-5 ポスター発表

##### 手話-日本語同時通訳における論理展開の伝達

白澤麻弓 (筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター)

聴覚障害者の社会進出にともない、彼／彼女らが社会的役割を担って自らの意見を発信する場面が増加している。これらの発信機会を最大限に保障するためには、手話を日本語に翻訳して伝える手話-日本語同時通訳(いわゆる読み取り通訳/以下、通訳)の存在が不可欠である。

白澤(2016 a,b)は、こうした高度専門領域における通訳者の技術向上を目的に、研究会場面における通訳技術の分析を行っている。これによると、通訳者の訳出には必ずしも研究会という学術的な場面に応じた言い回し(レジスタ)が習得できていない様子が見て取れることや、全体的な訳出率は高くても、学術的に重要な言い回しにおいて誤訳が発生していること等が指摘されている。また、白澤(2017)では、より経験の長い通訳者の訳出を分析対象とし、話者の伝えたい論旨がどのように伝達されているかを明らかにしている。この結果、単純な事実の伝達部分では訳出のずれや誤りは生じにくい、話者の価値を含む発言部分でその程度や意味にずれが生じやすい可能性があることが指摘されている。

一方、話者の意図を正確に伝え、通訳を利用した聞き手が手話を直接理解している参加者と同様の情報を得るためには、話の論理展開を正確に掴み、正しく伝えていく力も重要であろう。そこで本研究では、白澤(2017)をもとに通訳者が用いている論理展開について詳細を分析することで、この特徴を明らかにすることを目的とした。

分析においては、日常的に手話を用いている聴覚障害者(女性 40 代)が一方向に話をしている映像素材(テーマ「米国における聴覚障害学生支援と日本の課題」)を基に、7名の通訳者(A~G)が手話から日本語への通訳を行っている音声を、ICレコーダーにて収録した。収録にあたっては、事前にスライド資料を提供して、準備を行っていただくとともに、映像素材の冒頭 1 分間を提示し、話者の手話や話の流れを把握したうえで、残りの 5 分間を通訳する形とした。収録は同一素材で 2 回行い、2 回目を分析対象とした。

この結果、①話者が新たな話題提示を行っている部分で、そのサインを読み取ることができず、単純な話題展開として訳出を行ったために、話の構造が見えなくなっている例や、②話者が論理的帰結として結論を述べている部分で、それが前段部分の説明のように伝えられていて、結論が見えづらくなっている例などが見られ、これらが理由で論理構造が十分に伝わらず、結果として論旨があいまいになってしまっている様子が見て取れた。

#### 【参考文献】

白澤麻弓(2016a) 学術分野における手話-日本語同時通訳の形態素解析. 日本通訳翻訳学会第 17 回年次大会当日資料, p.25.

白澤麻弓(2016b) 学術分野における手話-日本語同時通訳技術—学術的に重要な用語や言い回しの選択に焦点をあてて. 日本特殊教育学会第 54 回大会予稿集, CD-ROM.

白澤麻弓(2017) 手話-日本語同時通訳における論旨の伝達. 日本特殊教育学会第 55 回大会予稿集, p.33.

2 日目 D 会場 (L704) 9:30 – 10:00

司会 古川典代

D-6

日本語言語学的ユーモアの翻訳規範について:『吾輩は猫である』を例に

王 夢蕾(筑波大学大学院)

本発表は、中国語を目標言語とした日本語ユーモアテキストの翻訳は各時代においていかに行われてきたのかを考察し、その翻訳規範をまとめることを目的としている。

ユーモアを訳す難しさは詩的言語の翻訳と同等に扱われてきた。これに対し、ユーモア翻訳の可能性は似ている言語と文化の間で比較的高いという指摘は複数あった(Raskin1989:129、Delabastita1996 など)。そこで、同じ漢字圏に属している日本語と中国語はまさしく似た文化を持っている言語と言えるが、日本語・中国語におけるユーモアの翻訳については、まだそれほど十分に研究されていないと言えよう。従って、本研究はまず記述的翻訳研究のケーススタディーとして、『吾輩は猫である』を取り上げ、文学作品における日本語ユーモアの中国語訳の翻訳規範を考察する。

夏目漱石は中国ではもっとも影響力の持っている日本文学者の一人であり、その代表作の一つである『吾輩は猫である』の中国語訳は 1936 年の程伯軒・罗茜訳が最初の一冊だと考えられる。そして、最新の訳作として、2017 年に出版された徐建雄訳がある。この 81 年の間では、管見の限り、(再版を除き)計 27 冊もの中国語訳が出されている。本研究では、1936年の程伯軒・罗茜訳、1993年の于雷訳、1994年の刘振瀛訳、2017の徐建雄訳を取り上げ、各時代の社会背景などを合わせながら、中に含まれている日本語ユーモアの翻訳規範を明らかにしたい。

また、ユーモアの定義と判断基準については、今まで多くの研究によって定義付けの試みが行われてきたが、本研究においては Raskin(1985)、そしてその延長線にある Attardo & Raskin(1991)の提唱したユーモアの定義・判定基準・分析方法及び分類を用いることにした。つまり、本研究におけるユーモアは意味分析によって判別可能な「スクリプトの対立とオーバーラップ」が同時に含まれている「言語的ユーモア(verbal humor)」であり、一般的に認識されている広義的なユーモアとは異なっているのである。更に、その中でもとりわけ翻訳分野で問題視されている下位分類の「言語学的ユーモア(Linguistic humor)」に着目し、考察を行う。

#### 【参考文献】

1. Attardo, S., & Raskin, V. (1991). Script theory revis (it) ed: Joke similarity and joke representation model. *Humor-International Journal of Humor Research*, 4(3-4), 293-348.
2. Delabastita, D. (1996). 'Introduction' in *Wordplay and Translation*. *Translator: Studies in Intercultural Communication*, 2(2)(Special issue: Wordplay and Translation), 1-22.
3. Raskin, V. (1985). *Semantic mechanisms of humor*. Springer Netherlands

2日目 D会場 (L704) 10:10 – 10:40

司会 古川典代

D-7

ハワード・ゴールドブラットの翻訳観と実践—莫言小説『生死疲労』を中心に—

ニイ ウエイ(常葉大学経営学部)

莫言は、中国国籍を持つ作家として初めてノーベル文学賞を受賞した作家である。その莫言の英語翻訳者で、中国現代文学の翻訳を最も数多く手掛けているアメリカの中国研究者であるハワード・ゴールドブラット(Howard Goldblatt)の翻訳観を、自身の言説(エッセイや討論会、インタビューなど)も参照しながら翻訳作品の分析を通して考察する。

莫言の作品は、これまで英語、日本語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ノルウェー語、韓国語など様々な言語に翻訳されている。最も注目されている小説『生死疲労』(2006年出版)——英訳タイトル *Life and Death Are Wearing Me Out*、日本語訳タイトル『転生夢現』——は、2007年にマンアジア文学賞にノミネートされ、2009年に中国文学ニューマン賞を受賞している。さらに、莫言のノーベル文学賞の受賞理由は「幻覚的なリアリズムによって民話、歴史、現代を融合させた」というものだが、『生死疲労』はその理由のすべてが集約されている作品でもある。スウェーデンアカデミーのノーベル文学賞選考委員会主席ペール・ワストブルグが読み上げたノーベル文学賞表彰の全文には、本作品が最初に言及されている。その作品に潜在している批判性について、「ロバと豚の喧嘩は人民委員の声をのみこんだ。無名の大衆の中から突然現れた者が人類生存状況中で、最も暗黒な生活を過ごした」と、ワストブルグは評している。

本発表は『生死疲労』を中心に翻訳研究者ヴェヌスティが概念化した「異化翻訳 (foreignizing translation)」と「同化翻訳 (domesticating translation)」の視点からハワード・ゴールドブラットの翻訳観と翻訳実践との相関を考察する。また、ハワード・ゴールドブラットの考える中国現代文学に対する構造的な問題点及び社会的コンテキスト(翻訳文学の変化やハワード・ゴールドブラットの経歴を含む)に対する独自の視点を踏まえ、文学翻訳のもつ異質性や本質的問題点(起点テキストと目標テキスト両者の重視度)を提起し、中国における翻訳文学システムの可能性を検証することを目的とする。



2 日目 D 会場 (L704) 10:50 – 11:20

司会 古川典代

D-8

日中連体修飾節構文の対応関係と翻訳規則—「内の関係」の連体修飾節を中心に—

谷 文詩(筑波大学大学院博士後期課程)

日本語は基本語順が SOV 型であり、連体修飾節が被修飾語の前に置かれている。中国語は基本語順が SVO 型であるにもかかわらず、連体修飾節の位置が日本語と同じく、被修飾語の前に置かれている。そのゆえ、日本語の「連体修飾節＋被修飾語」構文は中国語の「連体修飾節＋被修飾語」構文にそのまま対応する可能性がある。

日本語の「連体修飾節＋被修飾語」構文を訳す場合、一部の日本語連体修飾節が長い場合、そのまま中国語の連体修飾節に訳されると、その訳文も長くなり、不自然になる可能性が高い。よって、読者が理解しにくくなる可能性も高くなるという認識が一般的である。

したがって、日本語の「連体修飾節＋被修飾語」構文を中国語に訳すと、中国語の「連体修飾節＋被修飾語」構文に日本語と同じ形で訳せる場合と訳せない場合があると考えられる。

(1) 原文: 先週スーパーで買ったパンはもう腐った。(訳せる例)

訳文: 上周在超市买的麵包已经腐坏变质了。

(2) 原文: 山田先生が英語を教えている男の子は自殺した。(訳せない例)

訳文: 山田老师教英语的男孩子自杀了。

(いずれも作例)

本発表は、コーパスから抽出した言語データに基づき、日中両言語における連体修飾節の長さの傾向を分析し、語数の面から日中の「連体修飾節＋被修飾語」構文の対応関係について検討し、日本語の「長い連体修飾節＋被修飾語」は中国語の「長い連体修飾節＋被修飾語」にそのまま訳すと不自然になることを検証する。

また、被修飾語と連体修飾節の格関係の面から、日本語における「内の関係」の連体修飾節と中国語における連体修飾節の対応関係を分析し、中国語の「連体修飾節＋被修飾語」構文に訳すことのできる日本語連体節の特徴を検討する。

#### 【参考文献】

孔繁明(2004)『日中翻訳要義』中国对外翻訳出版公司

朱德熙(1984)『定語と状語』上海教育出版社

寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集 I』くろしお出版

鄧敏君(2008)「日本語・中国語間の翻訳テキストにおける文長の傾向：双方向パラレルコーパスを

用いた翻訳行為の特徴の分析」『翻訳研究への招待』日本通訳翻訳学会

2日目 D会場 (L704) 11:30 – 12:00

司会 古川典代

D-9

ウェブニュースの中日翻訳における文の区切りと文の繋がり

李 正政 (広島大学大学院国際協力研究科博士後期課程)

ウェブニュースの中日翻訳の過程を探ると、原文の中国語ニュースと訳文の日本語ニュースとの間に、文の対応が認められないことがある。例えば、文を区切るときの句読点の使い方や、文を繋げるときの接続表現や指示表現の使い方に異なることが挙げられる。

本発表の目的は、ニュース文章における文の区切りと文の繋がり注目し、ニュースの中日翻訳を行う際、中日言語表現の相違によって、訳文がどのような特徴を持つようになったのかを明らかにすることにある。人民網の中日対照ウェブニュース 10 篇(中国語原文 156 文、日本語訳文 182 文)を用いて考察すると、次のことが明らかになった。

①翻訳を通じ、ニュースの日本語訳文では、文の区切りが 39 ヶ所増えた。それは中国語原文では元々「，」で繋がっている二つの文(分句)が、日本語訳文では句点「。」によって二つの独立した文に分けられたためである。文が区切られるのは主に四つの場合である。

- a. 前文と違って、後文の主語(主題)が変わる場合。
- b. 接続詞や、“首先…其次…”のような文の段階を分ける表現が現れる場合。
- c. “近期”、“未来”のような時間や期間を限定する表現が現れる場合。
- d. “通过”、“希望”のような動詞が文頭に用いられ、文の主題を変えつつ、新しい一文を始める場合。

日本語訳文で文を区切るのは、中日言語の文接続における形態の問題に関わり、また、談話の視点から文の話題についての捉え方に相違があるためと考えられる。

②文の繋がりに関与している接続表現と指示表現の使用がニュースの日本語訳文には全体的に少ない。接続表現については、逆接型の「だが・しかし」と、添加型の「また」、補足型の「ただし」しか現れず、オリジナルの日本語ニュースと比べ、かなり単一化している。一方、指示表現については、翻訳された日本語ニュースではオリジナル日本語ニュースの「ソ」系の多用と異なり、「コ」系の使用がほとんどである。「コ」系は先脈指示の役割を果たしており、先文との結び付きを強めるためと考えられる。また、接続表現と指示表現の代わりに、「同～」表現や主語を補充することで、文を繋げる役割を担う傾向がある。

ニュースを日本語に翻訳する際には、読み手が読みやすいように、文の区切りを通して短くし、文の繋がりが必要なところにだけ接続や指示などの表現を入れている。そのため、訳文のスタイルが全体的に簡潔化されている傾向にあると言える。

D 会場 (L704) 13:30 – 14:00

司会 長沼美香子

D-10

翻訳教育と異文化理解: アラビア語から日本語への字幕作成を例として

ワリード・イブラヒム (カイロ大学)

翻訳は高度な語学力が要求される行為であるとされているが、文法規則の知識をはじめとする言語能力が高いだけでは翻訳者の職能として十分とは言えない。良質な翻訳者を育成するためには、言語能力だけでなく、異文化理解やコミュニケーション能力を養うことも必要である。母語と学習言語、またその両文化における差異が学習者にとって理解されやすい行為の一つとして、字幕作成がある。字幕作成は、学習者の異文化への知識を深め、コミュニケーション能力を高めるのに効果的である。本研究では、日本人アラビア語学習者とエジプト人日本語学習者のそれぞれが作成したアラビア語の映像の日本語字幕を分析し、現状の翻訳教育の問題点を整理する。そして、文化的要素にかかわる問題点を学生の誤訳から分類し、それぞれの誤訳の原因を考察することにした。

篠原(2013)が言及しているように「映画字幕には、多くの視聴者が一読して理解できるような平易さと簡潔さが求められるため、異文化要素をどう処理するかは訳出上の問題となる」という。平易さ・簡潔さが優先された結果、字幕訳出では省略化・一般化によって、元の台詞データの 43% が失われる (de Linde and Kay, 1999:51) と指摘されている。訳出の際のデータ喪失を最小限にすることを目指すならば、理論的かつ総合的な翻訳指導法を検討し直す必要がある。字幕訳出の際に、起点文化の視聴者に引き起こされたのと同様の効果が目標言語の視聴者にも引き起こされなければ、コミュニケーション上の障害にもなり兼ねない。それを避けるため、訳出者は二、三秒表示される台詞の背景にある文化的要素を把握し、字幕でそうした背景を含めて目標言語の視聴者に伝えなければならない。このように、翻訳には社会文化的な知識が不可欠である。翻訳者は、両文化に通暁しており、さらに両文化の仲介者としての役割を担うことが期待されている。そのため、筆者は翻訳の授業の学習目標を「コミュニケーション上の目的を目標言語の訳文でも果たせること」と定めた。

本研究の主な目的としては、字幕訳出の際に、文化的要素・思考様式・対人関係・人格的気質等、翻訳に関わる多くの要素を考慮した指導法を探ることである。本研究によって、言語的な面からも、台詞が含意する皮肉・冗談・言い回し等のような言語表現への認識を深め、対応訳語の選択や文の構造・省略可能なものとそうでないものとの区別ができる能力を身に付けられる指導法の確立が期待される。

#### 【参考文献】

篠原有子(2013)「映画『おくりびと』の英語字幕における異文化要素(日本的有標性)の翻訳方略に関する考察」、『翻訳研究への招待』No.9

de Linde, Z. & Kay, N. (1999). *The Semiotics of Subtitling*. Manchester: St. Jerome Publishing.

2 日目 D 会場 (L704) 14:10 – 14:40

司会 長沼美香子

D-11

日ア語、ア日語の比喩の意味理解とその翻訳法—慣用的比喩表現を事例に—

上川 アルモーメンアブドラー(東海大学国際教育センター)

本研究で焦点を当てるのは日本語とアラビア語の慣用的比喩表現とその翻訳過程である。比喩表現の翻訳に求められる概念・規定は翻訳全般と同様に肝心な要素になっている。その根拠は慣用的比喩表現の特性と意味単位として示す大きさにある。

本研究は、第一に従来の慣用的比喩表現と翻訳の研究においてほとんど分析されていない日本語とアラビア語の比喩表現をどんな翻訳方法で訳されているかを検証した上で、「死」、「恋愛」などにまつわる日本語とアラビア語の慣用的比喩表現を構文転換や概念体系等様々なレベルにおいて分析を行う。その上で特に日本語の慣用的比喩表現をアラビア語訳するに当たってどんな問題があるのか、また、どんな処理が必要なのか、事例に即して具体的に両言語の慣用的比喩表現の翻訳法にみられる個別的・普遍的特徴を明らかにする。

データ収集では、日本語とアラビア語の対訳のコーパスが構築されていない状況などを踏まえて、既存のニュースや文学作品、辞典事例などの日本語やアラビア語対訳データに加えて筆者が自ら訳出したアラビア語訳やアラビア語訳者によるインフォーマントも設置した。

[分析事例]

原文:坊主憎けりや何とやらということであろうか。

(イスラーム世界の現在形、「開戦」は 5 月下旬 決して突然ではなかったカタール断交、ニューズウィーク 2017/06/07 保坂修司著)

アラビア語訳:

"هل هذا تطبيق للمثل القتال" إذ كره الشيخ كرهت عمامته (アマーバプログ、マイサラアフィフイ訳)

意味:師が嫌われるとなれば、その被り物も皆に嫌われてしまうという言い伝えなのなだろうか。

上記の原文の「袈裟」をそのまま訳して通じるようなアラビア語は存在せず、また、アラビア語の語彙において「坊主」と「袈裟」のイメージ上のレアリアによる関係性が伝わらないため、原文の意味に近い別の比喩表現に置き換えて訳している。このようにレアリアを取り入れた表現を処理する際に、訳者はレアリアそのものではなく、その転義的意味や何らかの特徴を念頭に入れながら、表現効果が原文と等しくなるような言葉を用いて訳すことが求められる。こうして慣用的比喩表現の比喩とそのイメージを壊さないためにも比喩の実現方法を工夫して翻訳処理を行うことが、大きな文化的ギャップのある日ア語の比喩表現の訳出において非常に多く見られる。